大勢歩いてゐた。あゝ九月一日はのろはれの日であつた。あの日は幾日過ぎても幾年たつても、わすれられない日であらう。

バラックの人達

赤坂區　青山尋常小學校
第四學年男　中島一郎（十二才）

うちの前の明治神宮外苑は、地震前にはたくさんの人が來て、道をなほしたり、木を植ゑたりしてゐた。その頃は廣々としてゐて、夕方さんぽするのにも都合がよかつた。晝間などは、日のよくあたる所で遊ぶのは氣持がよかつた。

ところが地震と同時におこつた火事に、家は燒かれたり、親に別れたり、子に別れたりして、やうやく逃げて來た人達がうちの前の外苑に來て、フロシキやトタンなんかで家を造つてゐたが、もう今ではバラックが一ぱい建つたので、そんな事も出來ぬ位である。木にひもをむすび附けて、バラックの人の着物がほしてあるのがよく見られる。九月の頃はよかつただらうが、冬になつて來ては、さぞバラックは寒いだらう。その寒さにも負けず、はかまもはかず、帽子もかぶらず、毎朝々々學校へ行く子供達は、さぞ苦しいであらう。『今日も學校でよい事をおぼえやう。』といふ一心から寒さも忘れて、バラックの横を、歩いて行く。冷たい風に吹かれながら。

まだバラックの建つて間のない日などには、毎朝かごをせ負ひ、『なつとう、なつとう』

と言ひながら賣歩くなつとう賣も居た。なつとう屋のそのあはれなよび聲が、次第に遠くなつて行くのを聞いてゐると、さびしくなつて來る。はだしですそをまくつて、次から次と賣つて行く幼い少女の姿はかはいさうだ。

今年の正月には、バラックの人も樂しく暮した。バラックの中からは、かるたの聲に續き、面白さうな笑聲がする。又子供達もたこを上げたり、羽子をついたりしてゐた木の葉も落ちたその後で、暖かい日の光を浴びながら遊んでゐる、うれしさうな子供達の心はどんなだらう。九月一日の事も忘れ、親や兄弟に別れた事も忘れて、知つてゐるのは樂しい、うれしいその事だけであつたらう。

でも日の沈む頃は、バラックの人に取つて何より悲しい時であらう。あの地震に續いておこつた火事に逃げて來た自分達の運命を考へて、急にさびしくなるだらう。

『あゝあのかはいさうな人達は大事にしてあげなければならない。』

僕はいつもこう考へて居る。

火　事

赤坂區　青山尋常小學校
第四學年女　蔭山郁子（十二歳）

九月一日
大地震大火災
めりめりめりめり
もえて行く
あつちでもこつちでも
赤い赤い舌だして
めらめらめらめら
なめて行く
家でも木でもかまはない
人でもなんでもかまはない
逃げて行く人
なめてしまふ
ほんとににくい大入道
ひとへ一つで
逃げて行く
一錢一毛もつてない
あはれな人を追つて行く
逃げても逃げても
おひかける

大震災と天皇陛下の御恩

赤坂區　中之町尋常小學校
第四學年男　岩崎武雄

人は災難に會ふ度にちしきを增すといふ事は本當だと思ひます。僕は昨年九月一日の大地震の爲に天皇陛下の御恩を深く心にきざむことが出來ました。今まで丁度花が開

いて行くやうに日に日に文明に進んで行つてゐた東京が思ひもよらぬ、震災の爲に燒け野が原と變つて終つた時は僕のやうな子供でさへ、この後東京はどうなるのかと眠れない程心配しました。まして國の爲民の爲に、たえず御心を用ひさせられる、天皇陛下の御心の中はどんなであらせられたでせう。陛下には罹災民の爲に新宿御苑をおひらきになり、又一千萬圓といふ大金をおめぐみになりました。陛下の此の御恩に對し國民の心はなほさら勇氣附けられた事でせう。こんな有難い天皇陛下をいたゞく僕達は早く大きくなり國の爲に働いて天皇陛下の御恩にむくいたいと思ひます。

奉祝御成婚

赤坂區　中之町尋常小學校
第四學年男　高野武雄

僕の御國はよい國だ
遠い〳〵昔から
天皇樣をいたゞいて
ほんとに平和なよい國だ
僕の御國の皇子樣は
日本男子のかゞみです
やがてめでたい御祝日
日の丸立てゝ祝ひませう

大地震と大火災

赤坂區　中之町尋常小學校
第四學年男　角野照顯

あゝ思つても恐ろしい九月一日。永い夏休が終つて、始業式に行つてお友達こ久しぶりで逢つたばかりに、午前十二時頃ガタガタとゆれ出した大地震は、東京中を驚かした。僕はすぐ飛び出したが、もう其の時は隣の玄關の壁は物凄い音を立てゝ落ちて來ました。今にもぶつかりさうになつたが、うまくのがれてやつと通りまで出た。家内中揃つて三聯隊の射的場に逃げました。たへ間なくゆれて居ます。今日は野宿と聞いた時はがつかりしました。日が暮れて行くにしたがつて、向ふの空は一面繪具で染めつくしたやうに眞赤です。地震に次いで發した百十六ヶ所の火事は何處までも、もへ

てついに、今まで錦を飾つた銀座も燒けて山の手方面の一部を殘したばかりで、此の廣い東京は燒野原にかはつてしまつた。いくら天をのろつてものろいきれない、この天災は何時までも僕の胸にのこるでせう。この荒れはてた東京を一日も早く元のやうにかへさなければなりません。

大震災と東京

赤坂區　中之町尋常小學校　第四學年女　堀口治子

九月一日に大震災があつて東京は火にまかれ、殆ど燒けて全滅に近く殘つたのは僅に山の手ばかりになつたのも、もう半ケ年の昔とすぎました。下町の方も大方バラックがたつて、三越や白木屋のやうな大商店はあちらこちらにマーケットだのといつて大きな店を出しました。けれどもそのすきまから風がふきこみ、屋根から雨がふりこむさうで、寒いこの頃では皆さんが困つてゐられるさうです。私たちの町は燒殘つたので毎日學校にかよつても、去年の九月以前と同じお机、同じこしかけで勉強して居りますが燒けた學校では、机も腰かけもないから、しよう油だるを腰かけにしたり、そまつなお机で間にあわせて居るのださうで、さういう話をきゝますとお氣の毒でなりません。市内電車はこむし道は惡いし實にこまつたものです。私共もこれからはせいたくな事はしないで、今までよりも一そう勉强して、りつぱな東京の町を見られる樣に祈ります。

大地震と天子樣の御恩

赤坂區　中之町尋常小學校　第四學年女　中野雅子

九月一日は大地震であつた。其の日から三日の間大火事がつゞいたので、わい〳〵さわぐ聲が大變でした。この東京ではなくなつた人が七萬四千人、行方のない人が二十三萬人、傷をした人が三十九萬人、燒けた家が二十九萬軒、倒れた家が一萬五千軒、まことにかはいさうな事であつた。このかはいさうな人々の子供も、今ではもうありがたいことには、學用品やばうしや、まんとや、其他いろ〳〵な物を諸所方々からたゞいて私どもの學校へも、澤山入學して居ます。これも天子樣の御恩と思ひます。もしも天子樣がおいでにならなかつたら、どんなにこまることかしれない。天子樣が

いらつしやつて、學校をおたてになつて人々に良い心をおつくり下されるから、方々の人たちがいろいろな物を贈つて下されるのであります。ことに天子樣は、この大地震でさいなんにあつた人々に、金一千萬圓を下さつたのであります。又皇后陛下はさいなんにあつた人々のために、お着物などを下さつたのであります。思ふと天子樣や皇后樣のありがたいことはたくさんで、山よりも海よりも大きいのであります。私たちはりつぱな人になつて、忠義をいたし、御恩をおかへしいたさねばなりません。

大震災と天皇の御恩

赤坂區　中之町尋常小學校
第四學年女　清水令子

あゝあのこはかつた、大地震大火災思ひ出すと私はおそろしくてたまりません。世界にほこつた立派な東京市は、この大震災の爲に建物の大部は燒きつくされて、僅かの間に住むに家なく、食ふに食物なき、あはれな避難民數多き有樣になりました。其の上親は子を失ひ子は親をさがしてゐるうちに命を失つて火の中に葬られた人は、幾萬かしれません。私達は此の恐ろしい災はのがれましたが明日からは學校に敎を受ける事が出來ません。世の中はくらやみになつてしまひました。電信、電話も通じなければ電車や汽車も通じません。のどがかはいても飯む水なく夜になつても電氣もつきません。唯聞く物、見る物はおそろしく、どうなる事かと心配いたしました。此時に當つて、御惠深き天皇は、明暮れ臣民の事のみを御心配になつて、事細に東京市民の樣子を御覽あそばされました。大そうかあいさうにおぼしめし、避難民をすくふ爲に、多くのお金を下さいました。又品々をたくさん惠まれました。僅か一二ヶ月の中に、私共は學校で勉强する事が出來るやうにはかつて下さいました。畏くも御所のそば近くまで、多くのバラックを建る事をおゆるしになりました。この惠に浴してゐる私共は一生けんめいに勉强して第二の國民となつて、一日も早くもつともつとりつぱな東京市をきづいて、天皇の御恩報じをしなければなりません。

大震災と天皇の御恩

赤坂區　中之町尋常小學校
第四學年女　中谷須壽子

天皇陛下が常に下萬民に御心を寄せられ給ふことは、父母や學校で聞いて居ります。

昨年の九月一日に東京を中心に、關東に一大地震火災がありまして、我が東京は其半分以上も燒てしまひました。天皇陛下は其時日光に御避暑遊ばされて居ましたが、このことを御聞になられ、いたく御心をなやまされ、之等人民の此の災なんにかゝつた者はさぞ困るであろうとて、金一千萬圓を下し給はれたそうです。天皇陛下が、かほどまで御心をよせられましたことは、まことに有がたきことであります。私は學校で先生からも天皇陛下の御恩は忘れてはならないと教はつて居りますし、勅語にも君に忠とありますが、人民としては一日も忘れてはならないと思ひます。

大震災と天皇の御恩

赤坂區　中之町尋常小學校　第四學年女　釼持富美子

天皇の御恩は海よりも深く山よりも高いと常に、お父さんやお母さんから、聞かされて居ましたが、今度の大地震の後に初めて其の有がたさを感じました。大正十二年の九月一日あの大地震が起ると共に、家はつぶれる、へいは倒れる、私達はお母さんに連れられてやうやく裏の山へ逃げ込みました。其の中に火事だと言ふので振りかへつて見ますとあちらの方にも黑けむり、こちらの方にも黑けむり、都の空は忽ち紅の色で包まれてしまひました。焰と焰は西から東へ、限りなくつながつて、やがては私達の家をも燒かれるのではないかと不安の内にも、一夜を明しました。夜が明けると赤い焰は黑いけむりと變つて、まだ燒け續けてゐます。誰も人の事などかまつてゐる事も出來ない、此の恐ろしい火事や地震の最中にも、じゆんさや、兵隊さん達はたえず私達に氣を附けて下さいましたから、皆が無事に日を送る事が出來ました。この樣に私達の安心してゐられたのは皆天皇陛下のおかげであります。此の御恩をおかへしするには地震の爲に燒けた東京を元よりもりつぱな都につくらなければなりません。

新　東　京

赤坂區　青南尋常小學校　第四學年男　菊池淳一

大震火災の爲に、はいと化した、この大東京をどうしたら、元より立派な都が出來るだらう。今の電車は、大こんざつだから、電車や、乘合自動車を澤山造つて、女でも子供でも、らくに乘れる樣にするといい。そうして、方々に、公園や、廣場を造つ

て、誰でも、よく運動をさしたり、何かの時、ひなんされる樣にすると良いだらう。又大きな西洋館には鐵こつを入れて、東京驛の樣に、こはれない樣にすると良い、そして、商工業をもつと盛にして、家の間をもつと廣げて、地震の時逃げられる樣にすると良い。

九月一日の地震

赤坂區　青南尋常小學校
第四學年女　深井ゐづ子

がた〳〵とゆれるとどうぢに外では、泣聲などきこへる。私は久子をだいて飛び出した、始は氣が張つて居たので、無中であつたけれど、しばらくたつと泣出してしまつた。空地へひなんしたけれど、お父樣がお歸にならない、これもずゐぶん心配だし、地震は度々くる六時頃お父樣がお歸になつた、その時弟も私も思はず、お父樣とかけ寄つた。間もなく一所に家へ歸へつた。度々ゆれくる地震の中で寢たり、起きたりして居たが、中々眠れないので、又ひなんした、空は眞赤で今にも火がきさうだ二日の日はあいかはらず、度々の地震と夜は〇〇人さはぎで數日はほとんど生きてゐる氣がしなかつた。ああ忘れられない、九月一日の地震。

大正十二年九月の大震災

赤坂區　氷川尋常小學校
第四學年男　小谷津君平（十一歳）

九月一日學校から歸へつて舟をこしらへてやがて出來上らうとする時、にはかにごと〳〵と動き出したと思ふまに、地震はだんだん大きくなりました。僕はおどろいておとうさんとたんすの前で小さくなつて居ましたら、たなから物が落ちる、まどガラスは落ちて來る、かべ土はしきりなしに落ちる、みり〳〵と物すごい音が聞へてとても家の中には居られなくなつて、急いで表へ飛び出して見ると屋根のかわらは、地の上に山のやうに積み重り、方々の新しい家や、造りたばかりのへいが、くづれてゐたのに又驚きました。けがした人々は、おいしや樣へかけこみます。それを見て氣の毒に思ひました。少し立つと、黑田さんの裏の方から火事が出ました。その火事をけすことが出來ず、大きくなるばかり、午後五時ごろには一面の火の海となりました。いよ〳〵家の方もあぶなくなりさうでしたから、私は大切な學校道具を持つてにげました。

七時頃にはまだ〳〵火はもえ廣がり、どう〳〵家のそばまで來た時、いさましいくつの音をたてゝ兵隊さんが、火をくひとめました。大勢の人々の喜びは、この上はありませんでした。この晩は家へ、はいれづ野宿しました。私の級でも燒だされが半分もあります。中でも氣の毒なのは、なくなつた山野邊君であります。大正十二年九月一日は忘れることの出來ない日であります。

復興の春

赤坂區　氷川尋常小學校
第四學年女　西村敏子（十年四ヶ月）

あゝ春春、私たちの最も喜ぶ樂しいかゞやかしい春がまためぐつて來ました。野にも山にも小鳥がさへづり、木々の葉は青々として、誠に春はゆくわいな氣持のよい時で御座います。東京の燒跡にも、毎日々々朝から晩まで、たえずつちの音がひびいてバラックが澤山建ちました。私たちは、小鳥のさへづるのを聞いても、つちの音を聞いても、去年の大震災を思ひ出します。家も燒けた。ざいさんも燒けた。かまどの下の灰までも、あのにくらしい〳〵惡まの手に、燒かれて終ひました。けれ共神樣は正しい者は、どこまでも、おすくひになります。家やざいさんも、こわされ燒かれて、何一つなくなつた私共にも、たつた一つお金よりも、家よりも、もつともつと尊い命と力が殘つて居ります。その力をもつて急に世の中が活氣づき、よみ返つてきました。今まで家ぞくをうしなひ、なげきかなしんで、仕事も手につかなかつた人々も、急に働きはじめました。あゝ之もみな神樣のおすくひの力と、我々國民の志のかたい爲でありませう。私はこゝで、『精神一到何事不成』といふかく言を守つて、光りかゞやくきぼうにみちた此の復興の春から、ふごりや、きよえい心を止めにして、清い心と元氣とをもつて、正直に一生けん命働いて、此の東京、此の日本を前よりも、もつと〳〵立ぱに盛にしようと思ふのであります。

大震火災中の美談

四谷區　第一尋常小學校
第四學年男　九山眞男

今度の震〻災で深川、本所あたりは最もげきれつだつた。深川の猿江小學校の校長先生はあの地震のあつた日、學校は鉄きんコンクリートなので、是なら大丈夫といふ

ので近所の人や、荷物を澤山入れ、雨天体操場などは、人や荷物で一ぱいだつた。所が、地震後の大火がすさまじい、勢でせまつて來たので、コレハ大變だ、これだけの人を早くにがさなくてはと、他の先生たちと共に、ひなん者をにがしそれから、御眞影を副校長に渡し、他の先生たちと一しよにひなんさせたが、自分はどうてい逃げるひまがないと考へ、かくごをきめられたものであらう。後でさがして見ると、運動場にちやんと坐つて、かぎを手に持ち、腕をくんだまま死んで居られたと言ふ事である。自分勝手に逃げず、人々を出してから逃げやうとしたが、逃げるひまなくとう〳〵ざん死せられたと言ふのは、ほんとうに美しい話である。

大地震の時感じた事

四谷區　第一尋常小學校

第四學年女　田中美止里

九月一日ののろはしい大災以後四五日は、人々は皆、生きた心持がいたしませんでした。それ程に、あの震火災はおそろしうございました。が、その恐しい中にも涙がこぼれるほど有難かつたのは、地方の方々からおくられた、お米、おみそ、おしやう油などの食料品、薬などの配給品を手にした時でございました。又方々の辻々に、たくましい少年團員、青年團員、町のおも立つた方、ざいがう軍人、見るからに恐ろしい劔附鐵砲を持つたけん兵などの、すがたが目にうつゝた時はうれしさがむねにせまつて、思はず涙を地に落しました。これも皆、國家のなさけでございます。私は、たとへ死んでも天皇陛下、地方の方々の御恩は忘れられません。

此の間の大地震

四谷區　第二尋常小學校

第四學年男　西野健次郎（十二才）

『お母さんくつをみがきませうか。』と言つて居る時、急に『ドカ〳〵〳〵ガタ〳〵〳〵。』と地震が來た。僕は又いつもの小さい地震だと思つたから別に氣にも止めず、ゑんがはへ出て行くと『ガタ〳〵〳〵。』と前よりも一さうひどくゆれるのでいそいでかけて行つて、お母さんと簞笥の横にしやがんで小さくなつてゐた。するとおとなりの、ふうちやんが『をばさーん、健ちやん。』と呼んで居るので、ゆれる中を入口まで出て行つて止むのを待つた。僕はお母さんとおとなりのをばさんや、ふ

うちやんなどと一しよに一生懸命にかけ出して有馬さんの庭へ逃げた。後から近所の人が『ハア〳〵』言ひながらかけて來た。お母さんは『ちよつと家へ行つて來るから氣を附けていらつしやい。』と言つて家へいらつしやつたがすぐ歸つていらつしやつた。又二度目の地震がゆれたので庭の物干の杭へつかまつた。二度目の地震もやつとすんだ。有馬さんの小使さんは物置小屋へ行つて、ござを持つて來てしいてくれた。僕はござの上へ『ドッカ。』とこしを下したが、その時僕はお父さんのことが心配でならなかつた。三時頃お父さんは歸つていらつしやつた。それからはお父さんがいらつしやるので、心強かつた。地震はひつきりなしに、ゆれるので僕はぶる〳〵ふるへて居た。東の空を見ると變な雲がモク〳〵と綿の樣になつてだん〳〵南の方へ行く。ずゐぶん恐しい雲だ。

地震と同時に火事が出た。僕は新宿の火事と下町の方の火事に攻められるかと思つてびく〳〵し居たが、幸に新宿の火事はきえた。

夕方になつてもう地震もさう大きくひどいのもゆらないので、お父さんとお母さんはもしか火事にあつた場合に持つて逃げる荷物をこしらへた。夜、電車通へ出て見ると東の方が火で眞赤である。れんが造りの家は大きなきずがある。土藏はくづれ、家々の屋根がはらは皆ずれさつて居る。道は土煙に包まれてぼうつとして居る。二日もずゐぶん大きな地震があつた。僕は二日二晩野宿した。

一箇月ばかり地震でびく〳〵者で落着かず、ゆれる度に有馬さんの庭へ逃げ込んだ。後で話に聞けばひふく所が一番ひどいとの事である。家のかべもずゐぶん落ちた。又あゝいふ恐しい地震が來ないやうにと思つて居る。

九月一日の大地震

四谷區　第二尋常小學校
第四學年女　町田純子（十二才）

九月一日に大地震がありました。私は御飯を食べやうとしてゐました。そこへぐら〳〵して『おや』と思ふ内にます〳〵ひどくなつて、たなからは物が飛下り、かべはバラ〳〵落ち、外を見ればかはらがボン〳〵飛びます。その恐しさは今考へてもふるへさうです。

一ぺんの地震が終ると、御飯をいたゞきましたが、どうしても、のどへ通りませんでした。早くお父さんが歸つていらつしやればよいと思つてゐたら、やう〳〵歩いて歸つていらつしやつたので、うれしうございました。

それから皆で右京町の避難所へ行きました。來る人〳〵皆ござを持つたり、ふとんを持つて恐しさうな顔をして入つて來ます。夕方になるにつれて地震からおこつた火事が、ます〳〵赤く見え、おまけに〇〇〇がばくだんをなげる音がするので、一そうこはくてなりませんでした。晩には家へ歸れることゝ思つてゐましたら、歸れませんでした。そしてゆめにも思はない原で一夜をすごしました。

山の手は地震だけですが、下町の方の人はうちがつぶれたり、火事で燒かれたりして、ずゐ分人死が多かつたさうです。まことにお氣の毒なことです。それでも水道は止り、がすは來ないし、電氣もつきませんので、大變不自由しました。

食物もだん〳〵なくなつて來て、どうしたらよいだらうと思ふつたら、地方から色々の物を送つて下さつたので助かりました。

九月一日は一生忘れられない恐しい日でした。

夜中

四谷區　第三尋常小學校
第四學年男　鶴田　修

風が吹く度に雨戸が『ガタ〳〵』と音を立てゝゐた。僕はその物音でふと目を覺ました。

またあのやうな恐ろしい地震かしらと思つたが、それは風の音であつた。お母樣の枕もとにある目ざまし時計が『カッチ〳〵』と音を立てゝゐるが、なんだかおそろしい樣な氣がしたので、ね床から出て行つた。それでも時間を見る氣にもなれなかつた。

外は雨が降つてゐるらしい。木の葉が『バラ〳〵』と落ちる音がしきりに聞える。こはいので早く眠らうと思つてゐても中中眠られない。

天井では鼠が騒いでゐる。弟にすりよつて見ると『すや〳〵』としてゐる『カッチ』と時計は五分前を報じた。幾つを打つただらうと考へてゐる間に夢の中の僕となつた。

大地震大火災

四谷區　第三尋常小學校
第四學年女　川口潤子

九月一日晝御飯をすまして遊んでゐる時、急にがた〳〵といふ音がしたのでびつくりして簞笥のそばに寄りました。

地震はます〳〵ひどくなつて、からかみは倒れる。かべが落ちる、大へんなさわぎになりました。一震が終つて外へ出ました。外へ出ると今度は火事でさわぎになりました。だん〳〵火事が近くなつたので、いよ〳〵逃げる仕度をしました。火事はいく所にも、おこつて逃げ場をうしなひました。まくら橋を渡らうとした時、お母様や、兄弟を見うしなつてしまひました。けれども、そこにゐると身があぶないので、私は火の無い方へかけ出しました。お母様や、兄弟の事を思ひながら、あびせくる火の粉を川の水で、けしつゝにげました。ほんとうに恐ろしい一夜でした。

夜明け方になると、やつと火が治まりました。私は歸る家もなく、お母様も見つからず、どうしようと思ひました。友達につれられて大倉さんのべつさうで休んでゐると、お父様がむかへに來て下さいました。お母さんや、弟や、妹たちの無事の顔を見た時には恐ろしい火事の事をわすれました。なにもほしいとは思ひませんでした。

今に見てゐろ僕だつて

四谷區　第四尋常小學校
第四學年男　武藤　正夫

今に見てゐろ、僕だつて、いつまでも人に負けてばかり居るものか、これでも僕の心には、大和魂がひそんで居るのだから。考へて見ると今までは、遊びが面白かつた、遊んだ後の勉強が足りなかつた。だが僕はいよ〳〵決心した。五年六年と進んでいよいよ學校を卒業する時は、だれにも負けないぞ、そして人々が競爭して心配してゐる府立の四中位は、やす〳〵と入學してみせる。

それには先づ體を丈夫にして、中學から高等學校だつて順に行くのだ、はしごだんを上るのと、同じことだ。

大學を卒業したら、なんとか良い考へも出來るだらう、あんまりつい落しない、ひかうきをはつめいしやう。

そして、かぢさへとつてゐれば、汽車にのつてゐるより大丈夫なものにしたい、さうしてもつと少さくしてどこの家にも、一臺位は買つて置けるし、しまひには汽車もいらない、電車もいらない、自動車もいらない、みんな、とりの樣に空をとんで、自分にけがもせないし、人にも傷をつける事のないやうにして見やう、僕だつて、なか〳〵面白い事を考へてゐる。

どんなことを考へると、今に見てゐろ僕だつて、の言葉が思はず口からほとばりし

出てくるのだ。

汗を流して東京市を建てませう

四谷區　第四尋常小學校
第四學年女　勝山和子

あんなに美しかつた東京の市街も、わづか二三日のうちに燒野原となりました。銀座の町も、淺草の町も何時になつたら、もとの賑かさになりませう。ほんとに恐しい天災ではありませんか。それにしても下町の方々は勇氣がおありです。もうバラックに不自由を忍んで汗を流して、働いて居ます。皆さん、私達も心をしつかり、ひきしめて儉約しませう。

そうして廣い道路や、こんもりと茂つた公園を增していたゞきませう。早く帝都を復興して私達に同情して下さつた日本の皆さんに、安心していただきませう。又、日本人が共同一致汗を流して、よく働いた事を世界の國々の人に見ていたゞきませう。

九月一日の大地震

四谷區　第五尋常小學校
第四學年男　小田榮一

一日の大地震には皆さまもさぞびつくりしたでせう。

ぼくは學校からかへつて、おこうこをきつて食べようとするとがたゞと家がゆすれてきました。

こいつはいけないと思つてごはんをおいて急いでたんすの下へにげました。

だん〳〵はげしくなるので、ぼくの家は一時つぶれるかと思つて、お父さんや、お母さんは、しぬかくごをきめてゐました。

やつとやんだとき、三疊のたゝみを外へもつてきてしきました。

内中は皆そこへ二三日程のじくをしてしまひました。

地震がおわるとすぐ追分が火事なので、むねがどき〳〵して、ぼくの顔色は見る見るうちにまつさほになつてしまひました。

大宗寺あたりに火事のけむりが近く見へました。火の粉ははげしく、右へ右へと、どんでいきます。やつと安心してゐると、又四方八方が火事なので、近所あたりは、けむにまかれてゐました。この火事の上へもつて來て今度は〇〇〇さわぎになりまし

た。〇〇〇がここえらえ、ばくだんをほうるから皆きをつけて下さいと、町會の人がいつて來ました。近所の人が皆ぼうをもつて外の出入口にばんをきめることになりました。ぼくのお父さんも、やはり皆といつしよに、ばんをしました。ぼくもお父さんといつしよになつてばんをしました。

まだ電氣がこないので、三日ぐらいはらうそくでくらしました。

〇〇〇も方々のお巡りさんにつかまりましたから、よほど少くなりました。

地震がすむとぼくは電車通りへ行つて見ましたら、本所深川のひなんみんが、おしりをはしょつてはだしで來るのもあれば、着物一枚で來るのもあります。

ぼくはそんな人を見たので、かはいさうばかりでなく、はだしで來る人は、さぞつめたいだらうとつくづく思ひました。

おなかがすいて車道へぱたつと、たほれた人を内の兄さんが見て來たそうです。そんな人がゐるから、ぼくらはしあわせだと心のなかでつくづく思ひました。

又やけしんだ人も何萬人もあるさうです、今ではもうおだやかになつて電氣もつくやうになりましたし、又べんりの汽車や、電車もはしるやうになりました。

ちしん

四谷區　第五尋常小學校
第四學年女　三浦正子

『ドシンドシングラグラグラ』ぢしんだつ!!と私は思はずいつた、おそろしくうごいた。

さあちやんはまご〳〵してゐる、私はおもてへとび出した。その時家の中はからかみがたほれるかべはおちる、それは〳〵たいへんなありさまです。

近所の方が前のいてふの樹にかぢりついてゐる、私もかぢりついた。

少しじしんがやんだら、さあちやんがなきながらでてきた、そばをみると屋根といふ屋根は、どれもこれもかはらが、おとされてどろがはみ出してゐる。

しばらくすると又『グラグラグラ』とゆれて方々の物のたほれる音や、子供のなきさけぶこゑがきこへる、ゐまはりの家が『ギシギシ』ときびのわるい音をたててうごゐた時は、私はも、これでつぶされてしまふかと思つた。

その中かんぶつ屋の兄さんが來て、子供はこんな所にいては『あぶない〳〵』とい

つて、さあちやんをだいて、おもてへかけだした。私もいつしよに通へ出た。近所のをぢさんたちが、ここなら大丈夫といつてむしろをしいてすはらせて下さつた。

しばらくすると父さんがかへつて來た、二人は父さんとさけんだ、父さんはいき苦さうなこゑで『けがはないかどうしてゐた』といつて父さんは、あぶなさうな足どりでせまいろじを通つて家へかけこんだ。

しばらくすると火事だ火事だといふ者がある。

なる程下町の方は黑い煙が立のぼつてゐる。

目がくれると、しだい〳〵に東の空一面がまつかになつて來た。

おうらいはひなんする人でさわがしい。

私たちはもうふを着ておうらいのはたへ野宿することになつた。

後に下町のやうすをきいた時、私はまだ〳〵仕合せであつたと思つた。

恐ろしい地震

四谷區　鮫橋尋常小學校

第四學年男　高橋秀雄（十二才）

九月一日の地震はゆめにも思はなかつた恐ろしい大地震であつた。朝から少し雨が降つたが、まもなくやんで、十時十一時となにごともなく過ぎたが、十一時五十八分になると、どつぜんがた〳〵とすさまじい音たててゆれ出した。僕はちやうどお母さんと、よそのおばさんと三人で地震がやむまで戸だなの下に居た。

するとちよつと靜かになつたので大いそぎで表へ飛び出した。

表へ出て見るとはるか東の方で黑い煙が見え出した。

間もなく火が見え出した。あゝ大へんどと皆がさわぎ出した。こは〳〵僕もお父さんもお母さんも、姉さんも、家へ入つて荷物を外へはこび出した。それから皆でにもつを、かついで安全な方へにげた。

一ッ大へん心配したのは、大きな姉さんが一晩中見へなかつたことである。それでも明る日あへたので家内一同顏をあわした時は、うれしいやらかなしいやらでむねが一ぱいになつた。

僕はあの時の事を考へると、おそろしくておそろしくて、たまらない。

恐ろしい地震

四谷區　鮫橋尋常小學校
第四學年女　小宮すづ（十二才）

私が學校から歸つてご飯をたべやうとしますと、あの大地震が始まりました。私はすぐにお母さんと、姉さんと、妹と、たんすの前にかぢりついてしまひました。すると外から、しきりになんだか聲がきこえました。その聲は『皆さん家にゐるときけんですから外へ出て下さい』と言ふのでした。そこでお母さんは、まづおゐはいを出してすぐに外へ出ましたが、おなかゞすいてたまりませでした。そうすると隣のおぢさんが、おにぎりをもつて來てくれましたから、それをいただいてたべました。

私の家はつぶれはしませんでしたが、悲しい事には、其の晩やけてしまひました。今では憐れな青山バラックに棲むやうな悲しい身分になつてしまひました。私は此の鮫橋の學校で毎日勉强をしております。これから一心に勉强したらいくら女でももとの樣な家が出來ないことはない、必ず勉强して二度と昔よりも立派な家を建てようと思ひます。

大震災の思ひ出

牛込區　赤城尋常小學校
第四學年男　窪田豐吉

丁度晝頃であつた。續いて二度の大地震がおそつて來た。家は倒れる。大地は割れる。たちまち起る猛火は大東京を包んでしまつた。救を求める人々のさけびは、天地もさけるばかり。今し方まで平和であつた東京も、今は生地獄と化した。えん〳〵たる、ほのほ消す人もない中に、强風にあふられてます〳〵狂ひまはるばかりである。危險をさけて市村座の所まで荷物を運んだ。後を見れば火の柱となつた電柱が恐ろしいひゞきをたてゝ倒れてゐる。家も土藏も何一つ殘す事なく燒落ちてしまふ。さんたんたる有樣は思ひおこすも恐ろしさにふるへるほどである。

やつと身一つで上野まで逃げのびた。

松坂屋へ火がついて、あの美しい建物も火の前には何の力もない。富坂まで來た時にはあとかたもなく燒け落ちてしまつた。

がうして昨日まで花の都と歌はれた、大東京も燒野原になつてしまつた。自然の力の

前には人間の力のいかにもたよりないものである事をつく〳〵と思ひ知ることが出來た。

恐ろしい思出

牛込區　赤城尋常小學校
第四學年女　上野絹子

九月一日のお晝の一寸前のことでありました。今思ひ出しても恐ろしい大地震がありました。私は頭をひやしてゐた赤ちやんの上に頭をつけて、ぢつとしてゐました。するとお姉様は『千鶴ちやんがいない』と言つて外へさがしに行きました。その時又大きいのがゆり出しました。私はもうつぶれると思ひましたから外へ出ました。近所の方は皆出ていらつしやいました。

千鶴ちやんは泣きながら歸つて來ましたので、お母様と赤ちやんと妹と私と四人で近所の廣いお庭へ逃げました。皆さんの足はぶる〳〵ふるへて顏の色も眞青でした。すると間もなく火事がおこりました。空は火事の煙で物すごうございます。こういふ時には家を心配して、すぐ歸つていらつしやるお父様が、いつまでたつても歸つていらつしやらないのですもの、お母様の心配はたいていではありません。時々小さい地震がゆります、火事はおかまひなしに、もえて行きます。その時私はどうなるかと思ひました。お姉様とお兄様は、しじゆう家のそばにゐてお父様のお歸りを見てゐました。その中に夕方になりましたので、赤ちやんを私に、だかしてお母様は家をかたづけに行きました。少したつて取りに來て下さつたので私と妹は家に歸りました。家は少しまがつて、かべはだいぶ落ちました。方々をふいてからおむすびをいただきましたが、たべる氣はしません。日はくれて眞暗になつても、お父様はお見えになりません。眞赤な火はぼう〳〵ともえてゐます。私とお姉様はだいじな物だけそろへておきました。お父様のお歸りがあまりおそひので、お兄様をお向ひにやりました。向ふの方は青空に星がたくさん出ていました。　お父様がお歸りにならないのは、　もしや火事でやけ死でしまはれたのではないかしらと思ふとぞつとします。お母様も『もしや、しやしんのくすりでも落ちてけがでもしていらつしやりはしないかしら』とおつしやつてばかりゐて口一つおきゝになりません。近所のおばさん方がいろ〳〵なぐさめても、ためいきをついてばかりいらつしやいます。間もなくお兄様は歸つていらつしやいました。お兄様のお話には門番にきゝましたら今宮城の中が、ごちや〳〵してなん

だか分らない」と言つたそうです。そいじやあこまるので親類のお兄樣と家のお兄樣と二人で行つてもらう事にしました。

それから親類のお兄樣をよんで行きました。教會のぼくしさんもお見まひにいらつしやいましたが、お父樣がお歸りにならないと言ふことを聞くと、大へんびつくりなさいました。私はねむくなつたのでげんくわんの所で妹と二人で、うと〳〵してゐましたら急にあたりがさはがしくなりました。二人は目をさまして見ると、お父樣がいらつしやいます。私と妹はあまりのうれしさに『お父さんつ』と言つて兩手にしがみつきました。お母樣の喜びはどんなでしたでせう。やけると思つて居た牛込はたすかつて、どんなに幸福でせう。學校もちやんとありますし、こんないゝことはありません。けれども、めちやくちやになつた東京がもとどほりになるまで、私が生きてゐるかそれを氣にして居ます。

なつかしい前の東京

牛込區　赤城尋常小學校
第四學年女　鹽谷千枝子

お當番が終つた。最後の窓をしめやうとした時、ふと眼にうつつたのは向ふの景である。

思へば〳〵去年の今頃は瓦の立派な屋根ばかりが續いて見えてゐたのに今は、トタンの屋根のみが夕日に照されて、ぎら〳〵といやらしく光つてゐる。なんていやらしい光だらう。

それにつけても、あの美しい〳〵町をこんないやなものにしてしまつた、あの時のことがそれからそれへと思ひ出される。

口惜しい〳〵と思ふと、どうかして元よりも、もつと〳〵立派な町にしてにくい地震をみかへしてやらうと、思はず齒をくひしばつた。

『鹽谷さん窓の外見て、さつきから何をしてゐたの』と言ふ誰かの聲にハツト我に歸つた。

『なんでもないのさあ早やく歸りませうよ』

私は何だかきまりが惡くなつて、眞先にどん〳〵校門を出た。

美しい神樂坂通は、もう電燈がついてゐた。

手紙の文

牛込區　愛日尋常小學校
第四學年男　宗村雅雄

叔父様、私共は一同無事で御座いますから御安心下さい。叔父様も新聞で、この大地震の事を御覽になつて、さぞびつくりなさつたでせう。

此の廣い東京市は、三分の二燒けて、わづか山の手方面が、淋しくのこつてゐます。御覽になつたら、どんなにびつくりなさる事でせう。一日の丁度お晝頃でした、急にがた〳〵とゆり初めました。

あんまり、ひどくゆれたので、家はもうつぶれたと思ひましたが、いいあんばいに少しもいたんでおりませんでした。

初の中は外に出ないで、内の中で靜かにしてゐましたが、あんまりひどいので外へ出ました。それで其の晩は、夜店のやうに往來にござをしいてねました。

その時は下町の方が燒けて、空は眞赤なので皆で、きれい、きれいと、いつてゐましたが、其の中火はだん〳〵こちらに近くなつて、二日の晩は麴町がやけて、火の粉が、どん〳〵飛んで來るので、こはくなつてとう〳〵幼年學校まで逃げました。

僕は學校の本をかばんに入れて、それを持つて逃げて行きました。

其の時はずゐぶんかなしう御座いました。三日にはだん〳〵おだやかになりましたが、○○○のさわぎで、又驚かされました。それでまだ家へ歸るのはあぶないといふので、とう〳〵四日までかへりませんでした。

毎日〳〵恐ろしい事で誠にいやでした。

此の間兄さんと、下町の方を見物してずゐ分驚きました。あのきれいな町は見渡すかぎり燒野原になつて、唯西洋館の外側だけのこつてゐました。

でも今では餘程バラックが建つてもう復興の氣持があふれてゐます。

叔父様もどうぞ近い内に此の燒けた東京を見物にいらつしやいませ。　さよなら

十月一日

叔父様　　雅雄

復興の都

牛込區　愛日尋常小學校
第四學年女　荒井芳子

思ひ出しても恐しい、九月一日もいつか夢の樣に過ぎて、こゝに半年近くを迎へました。

山の手に住んでゐる私達は、火に攻められた下町邊の恐しさを知らないかはりに、又復興の樣子も知りませんでしたが。私は二三日前にお母さんに連られて、新らしい銀座通を見に參りました。

九日の末にやつぱり、お母樣に連れられて、九段の坂上から見たあの燒野原には、もうぎつしりとバラックが立ちました。銀座通りは、震災前より驚くほどきれいなお店が軒を並べ、美しいおひな樣も飾つてありました。

ひゞのいつたゝ大きな建物には大工さんやさかんさやんが、忙しさうに働いて居ります

あゝこうして東京の町は復興して行くのだなとなんとうれしい心持になりました。

大地震の日

牛込區　早稻田尋常小學校
第四學年男　渡邊倭文男

大正十二年九月一日、それは僕等の小さなあたまにおそろしいかんじを思はせた。其の日は丁度夏休みもすんで、學校は始業式の日であつた。

家に歸つて僕の日課ともいふべき弟の守をすべく、おもちやをひろげて、遊んでゐた。處が何だか變な雷の樣な音が聞えたので、弟にお化が出たとおどかしたが、それが地震となつて、

ガタ〳〵

とゆれだした。

何だ、又何時もの樣な地震だと思つて、なほも弟をおどかした、けれどもそれが天地もひつくり返るかと思ふ程の大地震となつた。

さきのおどかしは、今度は自分のおどろきとなり、顏を青くして、あはてゝ外へ飛びだした。

つゞけさまに餘震が來るので、往來はあぶないから、後のお寺の松の木の下にひなんした。

そこには近所の人たちが二三十人も集つてゐた。

ゆれる度に皆は松の木につかまる。それを何回もくり返してゐる内に夜になつた。

空を見るとそちこちに火の手が上つて眞赤になり、今にも僕等の居る所へ火がおしよせてくるかと思つて、ねむることが出來なかつた。

そして二日二晩といふものは、そこで野宿した。

あの時の事を考へ出すと体がぞつとするが、今となつてはもうまるでゆめの樣だ。

大地震

牛込區　早稻田尋常小學校
第四學年女　本橋嘉代子

ミリミリ〳〵ガタガタ〳〵〳〵

とゆれはじめた。

『そら大變よ、庭へ下りなさいよ。』

と母はおつしやつた。一同下りて外へ出ようと思つたら、あいにく木戸にかぎがかゝつてあつたので、私がはずさうと思つても、きがせいてゐて、なか〳〵とれない、やうやく地震はやんだので外へ出て見たら、大せいの人が立つてゐる。

この人たちの顏の色は皆眞青で、だれ一人としてげたをはいてゐる人はなかつた。

『ほら、又だよと』

三宅さんのをさんがおつしやつたので、皆はふとんをかぶるやら、にもつをしようやら大へんなさわぎをした。私は今まであわてゝゐたので、何もかもわからずにゐた。

氣がついて見ると手には、しつかり、お箸をにぎつてゐた。

ふと東の方を見ると、まるで入道雲みたいな煙が、あつちからも、こつちからも、むく〳〵と上つてゆく、一時はこちらまでもやけてくるといつてさわぎましたが、よいあんばいにやけなかつた。

夜は雨戸をしいて色々の物をだしてねましたが、そこいらのものががたりと動いても、びつくりして飛起きたくらゐでしたから、ゆつくりねむられませんでした。

『はやく夜が明ければよいが』

と私はつぶやきながら、空ばかりながめてゐた。すると明星がきら〳〵光つてゐたので

飛起きました。

まだ煙はさかんに上へのぼつてゆきました。にはとりは地震のこともしらないでいつものように

『コケコッコー』

といせいよく歌を歌つてゐる。

『今度十二時には又大地震がくるさうです。』

と大聲をあげてよその人がふれあるいたゐた。かふいふふうに度々おどかされたけれども、

このごろはなれてしまつて、げんきよく學校へ通ふやうになつた。

帝都復興

牛込區　餘丁町尋常小學校　第四學年男　柳澤正雄

大正十二年九月一日に東洋第一の帝都東京は、大震火災におそはれて、わづか三日の中に、めちや〳〵につぶされた上に燒かれてしまつたが、人の力はおそろしいもの、大工さんは家をたてる、電氣局では早くバラックへ電燈をつける、水道課では震災ではこはれた所をなほす、鐵道省ではたくさんの復興品をうんぱんする、こういふふうにあらゆる階級の人が勇敢に共同一致して、前の帝都よりも、もつと〳〵りつぱな外國にもおとらなぬ大帝都をつくらうと、日夜はたらいたので、今東京の九段坂上から見ると、ずうつとバラックが出來て、もうすぐ本けんちくにかゝらうとしてゐる。

又下町へ行つて見ると大工さんがみんな一しようけんめいに、かなづちやかんなをふるつて、僕たちとおなじみの、少年少女のために、おゝいそぎで燒けた學校の假校舍をたてゝゐる。又バラックの學校では、れんがをつみかさね、その上に板をのせた机で、本をよんだり字をかいたりして、一心ふらんに勉强してゐる。

それから政府では、はば廣の道路をつくつて、これからの災害のため人命をうしなはないやうに、又各區に公園を一つぐらいづゝつくつて、市民の衛生や、體育の增進をはかるさうである。

それで、この分なら十年もたたない中に、外國にもおとらない、りつぱな帝都が出來上るにそういない。僕は實にゆくわいだ

大地震

牛込區　餘丁町尋常小學校
第四學年女　山田君子

大正十二年九月一日には東京に大地震がありました。

私は一日學校へ行つて始業式をしてかへつて來て、お晝の御飯を食べてゐますと、家の戸棚がかた〳〵といつて來ました。すると、お母さんが『おや地震だ』と言ひました。

私はこわくなつて、御飯を食べるのをやめてしまひました。

そうすると、地震がだん〴〵強くなつて來ました。

私はなほこはくなつたので、柱につかまつてゐました。

するとどた〳〵と色々な物がおちてきました。

私はあまりに大きな音がしたので、目をつぶつて手をあはせてなんみようほうれんげきよう〳〵と言つて、おがんでゐました。

お母さんも、やつぱりなんみようほうれんげきようと言つて、おがんでゐました。

そして、すこしたつて地震がしづまつてから、目をあいて見ると内はつぶれてゐました。

私は弟はどうしたかと思つて見て見ると、かべの下の所でもく〳〵とうごいてゐました。

そこへお父さんが、はしごをもつて來て、弟をだしておいて、それから私をだしてくださいました。

私はだしていたゞいたけれど、どこへにげようかとまご〳〵してゐました。

するとお母さんが來て、私と弟とをつれて原の方へ行きました。そして原の所にある松の木にかぢりついてゐました。

そしてふと向ふを見ると東の方が眞赤でした。

私はあら火事だと言ひました。

そうすると又しんぱいが、うかんできました。

それは京橋にゐる、にいさんのことでした。

私はにいさんはどうしただらうと思ふと悲しくなつて泣いてしまひました。

するとお母さんが『泣くのではありません、明日お父さんがにいさんを、さがしに行

つてつれて來て下さるから、大じようぶです』と言ひました。
その内にだん〳〵くらくなつて來ました。そうするとお父さんが、ふとんやござや、いろ〳〵な物をもつて來て、私と弟にキャラメルとおせんべをくださいました。
私はそれをたべてゐる中に眞くらになりました。
お母さんはそこへ、お父さんがもつて來た、ふとんをしいて『お前たちはこの中へはいつておいで』と言ひました。
私は弟と一つしよにふとんの中へはいりました。そして又東の方を見るとまだ眞赤でした。
私はぼんやりと、東の方を見てゐましたが、なか〳〵きえませんでした。
その内に夜があけました。すると、お母さんが『赤い物が見えたよ』と言つて私の手を見ました。
私も見ました。すると手の所に、三本深くきれてゐました。
私はむちうでしたから、わからなかつたのです、そしてお母さんは、すぐ藥屋へ、行つて藥とほうたいとをかつてきて、手をいわいてくださいました。
すると向ふの方の人がなんだかごちよ〳〵と話をしてゐました。私がそつと聞いてゐると、その人は〇〇〇が井戸の中へ毒を入れたり、火をつけたりしてゐて、あぶなくてこまるなどと話をしてゐました。
私はそれから四日間野じくをしてゐました。
そして四日の日に雨が降つて來たので、新橋さんと言ふ人のお内へ行きました。それから三日四日たつてから、四谷の二俣さんの内へ行きました。
すると向ふの内の人が地震は東京ばかりではありませんねと言つてゐました。
それから内へはいつて見ますと、お父さんはくつをはいて、京橋へ行つて見てくるといつてゐらつしやいました。そしてその日の三時頃になると、お父さんがにいさんをつれてかへつて來ましたので、私はとびあがつてよろこびました。
するとにいさんは、私と弟とに色々道々であつたお話をしてくださいました。
それから九月も十月も四谷にゐました。そして十一月五日に、又富久町へ來ました。
それから、九日の日から學校へかよひました。

下町の方から聞える音

牛込區　津久戸尋常小學校

第四學年男　岩見鑛一

ドン〳〵といふ音が下町の方からひびいてくる。たぶんバラックを建てる音だらう。こういふふうにだんだん東京がりつぱになるのだと思ふと、この音を聞いてゐてもうれしくなる。この音とともに出來る東京も、この音を聞くとうれしいだらう。

九段の坂の上へ行くと、ドン〳〵といふ音がしきりに聞こえる。

又この音がすればする程、ピカ〳〵のとたん屋根のバラックが出來る。

出來れば出來る程東京はさかんになる。

なんといふ、いい音だらう。

九月一日の大地震

牛込區　津久戸尋常小學校　第四學年女　吉崎輝子

あの大地震の時私は、學校から歸つて來て、せんぷー機にかゝつて涼んでゐました。すると突然に地ひゞきがしてきました。すると、すぐガタ〳〵とゆれ出しました。私はアツ地震といつて、直く外へ飛び出しました。あとから皆さんが裏の空地へ逃げろ逃げろと、叫んでゐましたが、私共は、もう火に追れて、今度は今戸公園の方へと逃げました。暫くそこにゐると、頭から血が出てゐる人、手が中程から取れてゐる人達が、皆今戸公園で休んでゐました。

するともう土手の方の家へ火がつきまして、あつくて〳〵、とてもゐられませんのでつぶれた屋根をのり越え〳〵逃げました。その時はもう人が一ぱいで、私の下にゐた子は五つ位で泣いてゐました。その中家の中の赤ちやんがつぶされさうになつて、泣く聲が聞えました。私はもう一生懸命に、逃げるだけは逃げましたが、電車通りで皆さんとやつと會ひました。それからどん〳〵逃げて上野で一夜をあかしました。

いつも短かいと思ふ夜が、その時には大へん長いやうに、感じられました。朝になりましたので、又今度は谷中のお寺へ行きました。そして休みながら、そうだんして、やつとこの牛込まで來たのでした。その時分は地震の地の字を聞いても、ふるえ上るほど、ビク〳〵してゐました。本當に憎い地震です。私はいつまでも上野で野宿した事は忘れられません。寒くて〳〵、みんなとだきあつてゐた事も忘れられません。その朝飲んだ水は、今までよりも幾層倍もおいしうございました。又パン屋で貰つたこつ〳〵のパンも、おいしうございました。大正十二年九月一日は、私には忘れられない

日であります。

オ正月ノ一日

牛込區　江戸川尋常小學校　第四學年男　後藤　茂

羽子ツキヲシテヰルト中澤君ガ來タ。

『羽子ツキヲシナイカ』ト聞クト、『文明館ヘ行クノ』ト言ツタ。

急ニ行キタクナツタノデ、オ母様ニ伺ツタラ「オバアサンガオルスダカラ、行クノハオヨシナサイ。』トオツシヤツタ。

ケレドモ行キタクテタマラナイ、ムリニ頼ンダノデ『ソンナラ行キナサイ』トオツシヤツタ。ウレシクテ〳〵タマラナイ。イソイデ仕度ヲシテ、神樂坂ヘ行ツタ。文明館ヘ入ルト紙ヲクレタ。ソレニハ『女ニツレラレテ』『嵐スル前』『豪勇ロイド』『塙ノ首カケ』ソレダケ書イテアツタ。中ハムサレルヤウニ暑イ。『嵐スル前』ノ終リハ涙ヲコボスホドデアツタ。コツケイナノハ、『豪勇ロイド』デアツタ『塙ノ首カケ』ノ初メニ尾上松之助ガ出タ。外ヘ出ルト、雨ガ降ツタノカ道ガ惡カツタ。空ハ一面暗イ、家ヘ歸ツタノガ六時スギデアツタ。

夜床ニツイテモ面白イコトヤ悲シイコトガ、後カラ〳〵日ニ浮ンデ眠レナカツタ。

地震

牛込區　江戸川尋常小學校　第四學年女　宇佐美柳子

ゆら〳〵〳〵『地震だ』『火事だ』
てんでに荷物をかたにして
人々みんなにげまよふ
火の手は四方にひろがつて
家々みんなやきはらう
地ごくのやうなこのちまた
親に別れたみなし子や
子供なくした親心
三日三晩野宿した

日本帝國大東京
燒野の原となりました

大地震

牛込區　市谷尋常小學校
第四學年男　中桐光彦

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、僕はお母さんとお湯に行つてゐた。手ぬぐひにしやぼんをつけ洗はふとした時、にわかにガラ〳〵といふ音におどろいてみると湯舟に一ぱいあつたお湯が、大波の樣にゆれて二尺もへつてゐる。ちやうど其の時は僕等二人だけで、外の人はたれもゐなかつた。

地震ですねといふとお母さんと手を引いてよろ〳〵しながら出て來た。

番頭さんはとつくに、はだかのまゝで外へとびだしてゐた。男湯の窓ガラスの落ちる音がガラガラバリバリと恐ろしくきこえる。

幸に女湯のガラスはあんまり落ちなかつたので、けがもしないで、やつと着物を着た、そこへお父さんも、お湯に來る途中で地震にあつたので僕等の所を心配して迎ひに來て下さつた。表へ出ると皆電車道にすわつてゐる、通は屋根から落ちた瓦や土などで、メチャ〳〵である。

電車も立往生してゐる。三人で急いで家に歸つてみると、兄さんはのんきに家の中に立つてゐた。

そうして僕等の顏をみると、大へんですよ、『本がみんなひつくりかへつて、臺所もメチャ〳〵ですよ。たなのものが落つこつたと言つた。

『そう！』と言つて、

お父さんも、お母あさんも內に入つたが、又グラ！〳〵とゆれ出したので、すぐに飛びだしてきた。其のうちに、おとなりのをばさんや、兄さんもみえて、おざしきの庭に集つてござをしいてすわつたり、いすにかけたりする。

ふと見ると東の方と西の方に黑煙が、モク〳〵と上つてゐる。

『あれ何でせう？』と聞いたら

『火事だらう』

と言はれた。僕はこわくなつて、母さんに、かじりついて居た。

だん〳〵見まひに來る、來る人の話を聞くと神田や、下町へんはドン〳〵やけて

ゐるさうだ。おとなりの兄さんが、『あれ〳〵』といふから、びつくりしてみると、天に白い白い雪の樣な、錦の樣な雲が、むく〳〵とわき上つてゐる。

此の雲は地震と何か、關係があるさうだ。さうしてゐるまにも十分毎位にゆれて來る學校はどうなつたかと心配だからお父さんと見に行つた。

門の前で校長先生に御目にかゝつて、學校は無事だつた事はわかつたが、東がはのへいは倒れてゐた。けいこは當分お休みださうだ。

通りは逃げてくる人で、大こん雜だ、家に歸つたが、だんだん暗くなつて來ても電氣がつかないからまつ暗だ。

空は火事でまつ赤だ、氣味が惡くて仕方がない、お祭のちやうちんをつける。

ガスがでないから、御飯もたけない。

パンも賣り切れて無いから、ビスケットで間に合せておく。

こわい〳〵と思ひながらも、いつかごさの上で、お母さんにくつついてねてしまつた。

夜が明けても、地震は止まない、火事もまた消えない。

本所も、深川も、淺草も皆丸燒ださうだ、死んだ人もたくさんあるさうだ、本當に氣の毒だ、母さんは『こんな事が一週間もつゞいたらどうでせう?』と言つてゐたが、一週間はたつても地震は止ま無い。

一ヶ月以上もたつてもまだ折々ゆれてゐる、困つたことだ。全体いつになつたら、すつかりしづかになるだらう、さうして燒野原になつた東京が、元のりつぱなにぎやかな、都になるのはいつだらう。

うぐひす

牛込區　市谷尋常小學校
第四學年女　早矢仕なつ

（一）
お庭のすみの梅の木に
かわいゝ姿が見えた時
梅のつぼみがお口をあいて
こつちへおいでと呼ぶでせう

（二）
みどりの羽を動かして

ホーホケキョーとないた時
のきのすゞめもおくびをまげて
かはいゝ姿に見とれるでせう

（三）

みどりの尾をば動かして
鳴くうぐひすの聲をきく時
まあるいお目々に、みゝずくも
森の木かげで、きくでせう

地震について

牛込區　牛込尋常小學校
第四學年男　山崎信太郎

大正十二年の九月一日の地震、思つても恐ろしいあの地震、僕は一日の地震になるまでは地震などと言ふ事は少しも思つてゐなかつた。所へあの物凄い地震で、僕は全く驚いた。晴れ／＼した午前十一時半頃急に、どすんと來た地震、あまり急なので驚き、あわてゝえんがはにゐたんだが、いそいで室のすみにかけこんで、ゆれる樣子を見てゐた。

その中にだん／＼とひどくなるにしたがつて、かはらが落ちる池の水が波をうつ、たなの物が落ちる、たちまちべんじよのはめが落ち、かべが落ちる、その物音が一つになつて聞える。

見る／＼中に、僕の兄弟、お父さん、お母さんの居る室の、かべが落ちて土けむりが立つ、地震がそろ／＼やむ、そのすきを見て表通へ飛び出した。

空を見れば南の方に一ヶ所、三方から火の手が上る、黑煙はます／＼ひどくなる。南の方はすぐ裏の士官學校で、西南の方は新宿で、東の方は砲兵工廠、神田水道橋であつた。

どれも藥品の火事だ、間もなく新宿、士官學校の火事はやんだ、東の方は白い入道雲を、をしのけ／＼て火の勢がます／＼ひどくなる。小餘震五六度、其の度ごとに驚く暗くなるにしたがつて煙が赤くものすごくなる。

日が暮れるといんきをぶちまけた光景となつた。

どどんとひびく火藥の音と同時に黑煙が上る。しばらく其の樣子に見とれてゐた。

ふと見れば道路へ避難してゐた人々が、皆心配さうに提灯の廻りにかたまつてゐる。
僕はいすにもたれながら、近所の人の話などを聞いて居た。
お父さんは地震があつてから間もなく、お役所に行つたが、まだ歸つて來ない、僕がうと〳〵とすると、三越がやけてゐるなどと言つて來る。皆の話によると食料がなくなる等と言ふので、僕は大變心配した、東の方を見ながら眠つてしまつた。
二日朝起きた、まだ燒けてゐる。いつたいいつまでやけるだろうかわからない、先づ井戸へ水をくみに行つて、顔を洗らい、御飯をたいたりした。
朝の御飯ものどに通らなかつた。その中に火の勢は、天をこがすかと思ふ程、空一ぱいに煙がつつんでゐる。火は左右にふへてきた。右の方は赤坂、芝、澁谷方面であつた、牛込は三方からかこまれてゐる。段々とあはれな避難者が來た。日は暮れる、お父さんが歸へつて來た。それからかりに小屋を造つてその中にふとんをしいて眠る事にした。今夜は日中よりずつと明るい其の中に、〇〇がせめて來たと言ふので驚いたそして、すみの方で小さくなつてゐた。
三日今日も昨日と同じであつた。
火は月島の方面を燒いてゐるらしい、方々から飛行機が飛んで來る、今夜は昨夜よりはずつとはげしい。
そして〇〇も大勢攻めて來たと、うはさされた。
一番うれしかつたのは、食料がなくなつた時、方々からくれた事であつた。もうこんなおそろしかつた事件を、ぽつぽつ出來て來るバラツクの間から思いかへす近頃となつた。
復興の元氣は人足のかけ聲、打上げるつちの音からもれてゐる、十年後の復興完成は僕等の力だ進め復興に——復興に——

小さな星樣

牛込區　牛込尋常小學校　第四學年女　成富妙子

(一)　小さな星樣　夕空に
　　きらりと光る　たゞ一人
　　くれる夕空　風の音
(二)　小さな星樣　夕空に

さびしくなかろか　大空に
暮る夕空　風の音
(三)　小さな星樣　夕空に
きら〳〵光る　星姿
暮れる夕空　風の音

バラック

牛込區　牛込尋常小學校
第四學年女　金子明子

ツイコノ間ノコトデアリマス。私は淺草の方へ參リマシタ。スルトミンナトタンノヒクイ屋根デ、一ツトシテ立派ナ高臺の家ハアリマセンデシタ。東京の大地震、大火事の爲ニ、リツパナ淺草中店モ、コワレタリヤケタリシテ、ミンナバラツクトカハツテシマイマシタ。

唯淺草觀音樣ダケハチヤント、モトノヤウニタツテキマシタ。

私ハソレヲ考ヘテ、ホンタウニ觀音樣ト言フ方ハエライ方オダト思ヒマシタ。ソシテコンナニエライカタガ、ココニマツテアルノニ、ナゼ淺草中店モ池ノ端モ燒ケテシマツタンダロウト考ガヘルト、バラツクノ中ニハイツテキル人ヲミナガラ、シミジミ涙ガ出マシタ。ソウシテ前ニ淺草ヘ來て色々ナ物ヲ見タリ、買ツタリシテ井タ事ガ、シミジミ頭ニウカンデ來マス。

バラツクノ中ノ人ヲ見ルトミンナモメンノ着物ヲ着テキマス。

小サイ子供ハミナ、オモチヤヲホシイ、オカシヲ食ベタイト、オ母サンニオネダリヲシテキマス。

ソウスルト、オ母サンガ、

オ家ハネエ前ハリツパダツタケレドモ、今ハコンナトタン屋根ノヒクイオ家ニナツテシマツタデセウ、ダカラオカサンガ一ツショウケンメイニハタライテ、モトノリツパナ家ニナラナケレバ、オモチヤモ、オ菓子モ、カツテアゲラレナイ、ト言ツテキルノヲ聞イテ、

私ハコノ自分ノ着物モ、オモチヤモ、オ菓子モ、家ヘイツテ取ツテキテ、アゲタイト思ヒマシタ、

ホントウニ雨ヤ雪ガ降ツタラバ、ドンナニ、コマルデセウ。

私ハコノ、コノマヘマデ立ツテイタ美シイ町ガ、マダアルヨウナキガシマス。ソシテ九月一日ノ大地震大火事ノ事ヲ思フトズキブン悲シク思ヒマス。

燒跡へ行つたら

牛込區　山吹尋常小學校
第四學年男　伊藤　律二

僕はこの間燒跡へ行きました。

行く途中電車の中で『深川へ行つたならば、元の友達と地震の時の樣子の話しや、又いろ〳〵な話しが出來るかもしれない』と、たのしみに思ひながら、電車の窓から首を出して乘つてゐました。

電車が九段の下を通る時、白地の着物をきてぼろ〳〵のかばんをさげた女の子が、何もないはいの上を二人で歩いてゐました、その女の子は、たぶん學校の歸り道らしかつた。

僕はそれを見て、かはいそうになつたが、僕も深川の燒跡に、バラックを建てゝゐたならば、やつぱりあの女の子と同じふうをしてゐなけりやあ、ならないだらうと、思ひながら乘つてゐた。

やがて小川町の停留場へ來たから、おりて被服廠まで歩いた。行つて見ると、死人の着物を燒いてゐた。それから佛樣の方へ行くとみんなの人は、目に涙をためて拜んでゐた。僕は泣いてゐる人々を見たら、なんとなくかなしくなつた。

それから元の明治小學校まで歩いて來ると、生徒たちは讀本をいたゞいて喜ばしそうに歸つて行く所であつた。

すると僕の友達の菅野さんが、讀本をもらつて歸つて行きながら、

『伊藤さん』

とよぶので、僕はふりかへつて見ると、菅野さんは、きまりのわるいやうな顏をして向ふの方へ、かけだして行つてしまつた。

僕は話がよつぽどしたかつたが、いつてしまつたのでつまらなかつた。

それから僕の家のあつた所へ來ると、家のざくろの木の根つこが殘つてゐた。それから僕と猪飼君と、よくしようべんをしつかけた、大室さんのへいの所にあつた、石と土藏が殘つてゐた。

つまらないので、黑江町の停留場まで來ると、僕より少しせいが小さいぐらいの少

年が遊んでゐた。ことによつたら、僕の友達が、その中にゐるかなと思つてよく見たらゐなかつたので、つまらなかつた、それから夕方頃家へ歸つた。

大地震

牛込區　山吹尋常小學校
第四學年女　杉山ハツ子

地震だ〳〵といつて外へでゝお寺の原ににげた、兄さんが戸をかついできた。私達はそれをしいて、ほつと一いきつくと、又も地震でおどろいた。空いちめんは赤い火や黒ッ煙につゝまれてしまつた。お寺の原の方々で、水をくれ〳〵といふ聲がきこえる、ほうぼうでかやをつつたり、戸をしいたり、ござをしいたりしてひなんをしてゐる。内では、よこはまに行つたお父さんがおかへりにならないので、心配してゐた所が、ゆうがたごろになつていらしやつたので、とび上るほどうれしかつた。お父さんによこはまはどうですかと、きいたらば、よこはまはぜんめつです、お父さんもけむりがまいてゐる所を、着物をかぶつて、にげてきたのです。そしてよこはまの内の、はつちやんは家の下になつて、けがをしましたとおつしやいました。東京でもその晩は、おほかた家がやけ、たくさんの人がやけ死にました。なんと、大正十二年九月一日はだいあく日なのでせう。

初春の夕

牛込區　長延尋常小學校
第四學年男　永森忠正

太陽も早や西へ沈んで、今迄青白かつた月が光々とした光をはなつて居る。驛に今省線電車が着いたらしい。一日のらうどうを終へた人や其の日の勤務をすごした人などが、ひつきりなしに通る、山の手はどうしてこんなに、人が多くなつたのだらう。これも皆あのしんさいの生んだ出來事の一つである。月の光は皆かげを地に落〳〵て家へ〳〵と急ぐ。

ヘッドライトを光らす自動車、ぴい〳〵つとけたゝましく氣てきをならす、下り列車なども、ざつとうをますやうに思はれる。

東の空に星が一つ二つ四つ三つ六つ、又二つ、西南北の空にもあらはれた。それを見つめてゐると、かなしい樣な氣持がする。

時折ふく初春のそよ風と共に、梅の香がたゞよいくる。
人かげまして來た。
柱の掛時計が、チン……七時を打つた。

九月一日の大地震

牛込區　長延尋常小學校　第四學年女　佐久間愛子

學校の式がおはつて、家へかへつた後、あのおそろしい大地震、天地もひつくりかへるほど、ひどい地震、私はあまりのおそろしさに外に逃げやうとしたら、お母さんが『屋根瓦がさかんにおちてゐるからあぶない』と申しました。私はセルロイドのお人形をかたく、だいて泣きたくなりました。お母さんが『お人形さんの顔を見ておいでなさい、お人形が泣かない中は、お前も泣いてはいけない』といわれました。又お母さんは『もし家がつぶれたなら、死ぬまでも笑つて死にませう。お父さんは、お役所が大切だから、家へは歸りません。』とよく敎へて下さいました。それから少し靜かになりましたから、外へ出ました。其の夜は外へ、たゝみをしいてねましたが、なかなかねむれません。方々の家では、をぢさんが家にゐてよいなあと思ひました。三日の日にお父さんがお歸りになり、お役所もぶじお父さんも、おけががなくお歸りになり家内一同よろこびました。
今思ひ出しても、あのおそろしい大地震、わすれる事が出來ません。又地震の時お父さんが『るすでも、お前はよく泣かなかつた、ほんたうにゑらい〳〵』とほめて下さつた事も、わすれる事はできません。

お守さん

小石川區　礫川尋常小學校　第四學年男　荒木村彦（九年十一ヶ月）

ねんねん〳〵
ねんねんよ
はやくねんねを
しなさいよ
はやくねないと

日が暮れる
ぼうやのねたあと
お月樣
につこり笑つて
顔出した

私は猫です

小石川區　礫川尋常小學校
第四學年女　戸高靜子（十年八ヶ月）

生れてから四十五日目です。親からはなされて、この家へもらはれて來ました。其の時はずゐ分とさびしかつたが、皆さんにかはいがられて今ではしあはせの身の上となりました。ちいさいじぶんは、障子をやぶつてしかられたこともあり、學校へいつてゐる靜子さんの本などを、やぶつてしかられました。又魚をたべて主人にしかられたこともありましたが、大きくなるにしたがつて一番だいすきな、ねずみをとつてたべるものですから、主人は大じにしてくれます。今では商賣に大切な私だと申して、家じゆうの人にかはいがられてゐます。私の一番いやなのは、ゆきの日です。雪が降ると主人はかはいがつて、こたつにいれてくれますので、私はありがたいと思ひます。

東京の復興

小石川區　明化尋常小學校
第四學年一組男　戸谷富士夫（十年六ヶ月）

我が國で最も悲しむべき大正十二年九月一日の大震火災の時は、早すぎさり、年改まつて、ここに十三年をむかへた。あの當時は話すも涙、聞くも涙、悲しい美しい話は、どこでも交換された。

それでも、今は誰の頭にも、復興と云ふ事がうかぶのである。見渡す限り燒野原の、東京が、此の五箇月で、こんなに復興するとは誰も想はなかつただらう。電車もだんだん數をまし、市の自動車も、いたる所に走つて居る。

二階立てこそ少ないが、仲々立派なバラックが日に日にふえて行つて、下町の商ばいも、いよいよ盛になつて行く。上野公園や、九段上から、下の町をながめると、白いトタンの屋根が同じやうな形をして、一面につゞいて居る。煙突の煙も盛に立ちのぼ

つて居る。それを見ると何となく愉快である。又山の手は、被害は少ないが復興の意氣は下町にも負けないで、人馬は絶間なく通行して居る。僕は身體を丈夫にし、又勉強をして、小さいながらも何時かは、東京市のためになる樣な事業をして、天皇陛下の御恩の萬分の一にも報い樣と思つて居る。

ひなん者のこと

小石川區　明化尋常小學校
第四學年女三組　青木孝子（十年六ヶ月）

私のうちには、ひなんみんが六人ゐます。それは、お父さんの弟で、元ぎんざの尾張町に、いらしやつたのですが、火事のために燒け出されて來たのです。をばさんのお話によると、地震の時には、びくともしませんでしたが、火事のために、四方八方から火にかこまれたので、にげるにもにげられず、やつとの事で、火の中をくぐつて來たさうです。そして、にもつも少し出して、つきじの本願寺へもつて行きましたが、本願寺も燒けたので、今は着のみ着のままに、なつてきたのです。そして、をぢさんはうちへきて、小石川はほんとうに安心だつたねえとおつしやつたので、私はそんなにぎんざあたりはひどかつたのかと思ふと、夜もろくろくねむれないような氣がいたします。かいせいどうろまで行くと、ひなんみんががつかりしたやうな顏つきで足をひきづつて來るのを見ます。私はあゝうちの、お父さんは今頃いせで私たちをどんなに心配してゐらつしやるだらうと、思ふとなんだかさみしくなつて來ました。

地震の日

小石川區　黑田尋常小學校
第四學年男　高柳剛（十年三ヶ月）

『早くげんとうきが出來るといゝがなー。』と思ひながら、晝御飯を食べるのも忘れて、いつしやうけんめいに、フイルムげんとうきを作つてゐました。もうだいぶ出來上つてゐるので、むちうだつたのです。ちやうど十二時五分前頃です。裁縫してゐたお母あさんが、とつぜん『あの音は何だらう』とたまげたやうな聲を出しました。僕は『ハツ』と思つて耳を立てると東南の方でゴゴーといふ音に、つゞいて地の中でズズーとつゞけてねばつたやうな音がしました。おやと思ふ間もなく、ズシーンと一大音きよう、ふいに家々がぐら〳〵とゆれ出しました。『それ地震だ〳〵』と、皆は

表通へどん〳〵飛び出しました。お母さんは『外へ出るんぢやない、かはらが落ちるから』と言つたので、げんかん口へ出てゐると、たなにあつた道具は、がらがらと落ちてしまひました。しかし僕の家はとたん屋根だから、つぶれはしませんでした。初震は四五分で終りました。ほつと息をつぐ間も無く、又ズシーンと一ゆれ。その時は貯金帳や書類はかばんの中に入れておいたので、かばんを持ち出しました。その中お父さんが會社から歸つて來ました。いそいで、御飯を食べやうとすると、かねちやん(女中の名)がゐません。お母さんが『かねちやん、かねちやん』とよんだのでかねちやんは表通りから、はだしで歸つて來ました。

お父うさんは歸り途、會社のすぐそばが火事で、水道橋と大曲のそばと、九丁目が、燒けてゐるといひました。水をくまうとしたが、もうすでにがすまで通つてゐません でした。その中紙屋のとよちやんか『皆が赤土にひなんしてゐますから、おいでなさい』と言ひに來たので、かばんだけ持つて、赤土に行きました。赤土には戸板がしいてあつて、近所の人が皆來てゐました。こゝで、すいくわを食べてゐる中に、何度も地震がありました。初の地震の時には少し安心した所へ來たので、あつと人々は聲を上げました。小さい子供は、よろけながら父母の所へ、かけ出して行きました。ゆれが終つたので、今度は場所をかへて、川ばたの方へ行きました。お父さんやお母さんは家へ歸へつて、いすや、もうふや、しやうじなどを持つて來て、ねる時の用意をしたのは三時頃でした。その時青年團の人が來て『もうじき大きな地震が來ます。もし無ければ、今から六時の間にきつと有ります。』と言ひました。四時頃丸太ぼーをたくさん持つて來て、今ゐる所から五間ばかりはなれた所へ、てんとをはらうと皆がいひましたが、僕は一つふしぎな事がありました。それはこゝから東南の方の空で、ちやうど白うさぎが飛び出すやうに、たいやうに照らされた、白い煙がむくり〳〵〳〵と、だん〳〵上の方へ上つて行き、向ふの家々の屋根の間々と、だん〳〵その煙は廣がつて行きます。僕はあれをたつまきか、火事の煙か、思へば思ふ程ふしぎです。

その中じゆんさが自轉車に乘つて來て『今神田から向ふが、全部燒けてゐます』といひました。もう五時になりました。近所の人は皆家へ歸つておはちを持つて來て、御飯を食べました。全く野宿のやうです。『さつきからだいぶ大きな地震も無いが、初震がとつぜんだから、これから又初震よりもずつと大きなゆれかへしがあるんぢやないか、このくらひの地震が有る前にはきつと小さい地震が二三日つゞくはづだが、又は伊豆三原山の、ふんかかもしれない』と、お母あさんが言ひました。

すつかりねるしたくの出來たのは、五時半より少しすぎてゐました。火事の煙が夕日と火に照らされて、眞赤になつてゐるのは、體がふるへる程でした。僕がもうふへくるまつてゐると、ちやうど六時に大きな地震が有りましたけれど、初程大きくならずにすみました。ねむくも無いが、ねてゐると三十分ぐらひで、目がさめてしまひました。

へいきな顔

小石川區　黑田尋常小學校
第四學年女　倉田光子（十年八ヶ月）

地震後にうちのお父さんが、おばあさんに、もうかいげんれいがひけたから、氣をつけなければならないねと、おつしやると、おばあさんは、おひるのごはんを食べかけてゐましたが、急に立上つて何を考へたのか、押入をがた〳〵してゐました。間もなく又きました。私はなんのきなしに、おばあさんのおびのあたりを見ると、おばあさんは、をびあげのかはりに、お金の入れた包をしてゐたので、私はお母さんにつついて敎へました。お母さんは、これをしつてお父さんにつげましたら、お父さんはどう思つたのか、大きな聲をあげて笑ひました、お母さん『プッ』とふきだしました。私も笑つてしまひました。おばあさんはまだへいきな顔をして、皆んなの笑ふのを、ふしぎさうに見てゐました。

子犬

小石川區　柳町尋常小學校
第四學年男　内村政雄

僕の家のすぢ向の石井さんの家で、黑がこのあいだ犬の子を六匹うみました。それは黑が二匹に茶色が三匹白が一匹です。生れたては見ませんでしたが、五六日たつて見たら、私たちの顔ぐらひになつていました。

紀元節の日學校でお菓子をもらつて家へ歸つたが、誰も食べないので、それをもつて遊びに行きました。

丁度石井さんの家の前へ來ると犬の小屋からキャンキャン泣く聲が聞えました。見ると子犬がクンクン面白さうに遊んで居ました。それでお菓子をこはしてお皿にのせてやりました。子犬はうれしさうによつて來て、むちうでお皿の上にのつたのでお皿が

ひつくりかへつてしまひました。こんどは一匹々々にお菓子を手にのつけてやると、なまあたたかい舌で、あちらこちらをなめくりまはし、あんまりくすぐつたかつたからはなしてしまひました。しばらくたつと、親の乳をのみはじめました。あふむけになつてのむのや、乳ぶさにかぢりついてのむのや、萬歳のやうなかくかうをしてのむのや、樣々でほんとに可愛かつた。

子犬が大きくなつたら、白を一匹もらひたいと、思ひますが、家のお父さんがきらひなのでもらへません。又學校から歸つたら遊びに行く積りです。

春が來る

小石川區　柳町尋常小學校
第四學年女　岡部いね

今日はよいお天氣なので、お母さんはながしでせんたくをしていらつしやいます。お母さんの指の間から、しやぼんの白いあはがにぢのやうな色をして出て來ます。空は眞青、高く〳〵とびがきもちよささうに、舞つて居ります。おえんがはのそばのうば車には、妹がすや〳〵眠つてゐます。

あたたかい日がぽか〳〵あたつて、ほんたうに春が來たやうです。土のしももとけて、ぬくぬくあたたかい息が靜かに上つてゐます。ふと、手洗の石のそばに、何か芽を出してゐるものがありました。よく〳〵見たら、それはももの木の芽ばえでした。もうすぐ春が來ます。春になると私のすきな、すみれも芽を出してさくことでせう。うれしい。もうすぐ春が來ます。

誰もしらない間に、
あたまを出した、
ももの木のめばえ。
さうだ去年の夏、
あたしがえんがはにこしかけて、
たべたあのももだ。
かわいい、かわいい、
ももの木の芽ばえ。
あしたから早くおきて、
水をやりませう。

小石川區

上野の山から

小石川區　小日向臺町尋常小學校
第四學年男　上　關　恕　雄（十年六ヶ月）

見渡すかぎりバラックが立ちならんで居る。

大きいの、小さいの色々である。トタンの屋根が夕日に照らされて、まぶしいほど光つて居る。

空地でたこをあげてゐる少年たちが、豆の樣に見える。あの少年たちは、火事で家が燒けたのだと思ふと、涙ぐましい、みれば、たこは五錢十錢の安だこだ。

整理のつかない、大通をボーギー車がレールの上をすべつて行く。兩側の人道には人が歩いて居るのがたえない。

燒けない家の人であらうか、自動車に乘つた立派な人が、近くの大バラックにはいつた。屋根には万國旗がひらめいてゐる。一つの大きな旗に、小扇洋品店と書いてある。

大きない、やこゝから見れば小指位、そばの人にくらぶれば大きい自動車が、ブー〜と勇ましく走つて行く。その後に小僧さんの乘つた、自轉車が走つて行く。

いつの間にか日がかなたの、森にかくれて、電氣がついた。大通はずいぶんあかるいが、ろじの方は暗い、きつと、びんぼうの人が住んでゐるのであらう。

つめたい風がほうをなでていつた。

星が一ツ二ツあらはれた。

九月一日の大地震

小石川區　小日向臺町尋常小學校
第四學年女　朝　倉　フ　ジ　子（十一年一ヶ月）

おひるじかくなりました。

お母樣は、はしら時計を見上げながら、『もう十二時ね、そろ〳〵お晝にしませうか』とおつしやつて、お臺所の方へいらつしやいました。

私はふと、お母樣に、言ふ事があつたのに氣がついて、お臺所の方へ行かうとしましたら、ふすまや、おろうかのがらす戸が、がた〳〵ごしん〳〵と、ひどい音をさせたので、びつくりして、妹と二人で、お母樣に『こわい』となきごゑを上げて、とび

つきましたら、前よりも一そうひどい音がして、上下へ、もち上げられたやうなきもちでした。

私は大急ぎで、がらす戸をあけやうとしましたが、やういにあきません。がらりつと、あけて外へとび出しました。

すると、あまりひどくゆれるので、お母様は妹といつしよにころんでおしまひになりました。やつと、おさまつたと思つたら、まだ地面がなみうつてゐました。ちよつと、おさまつてゐる中に、伊賀さんのおにはへ入れていたゞきました。木が一番多かつたので。

それでも餘震が何度となく來るので、こわくて〳〵たまりません。お母様にいくども〳〵『大丈夫、えゝ大丈夫』ときゝましたら、そのたびに『大丈夫々々々』と元氣に言つて下さつたので、半分安心したやうな、半分心配なやうな心持で、お母様からいたゞいた、カステラや、ウェハースなどを食べはじめました。けれどちつとも、ふだんのやうに、おいしくはありません。

その中に西から南へかけて、きみの惡いほど、まつ白な入道雲が、むく〳〵〳〵とわいて來て、それがだん〳〵と近くなつて來たので、ゐても立つても居られないほど心配でした。

それに火の粉の小さなのが、風にまじつて、チラ〳〵おちて來るのでよけいです。

岡田さんのおばさんはあまりびつくりして、頭がぼつとしたからと、ぶどうしゆをのんでいらつしやいました。お母様も一口おのみになりました。妹はお母様がだいて走りまはつたので、つかれたのでせう。だかれたまゝのんきな顔して、ねむつてしまひました。

× × × ×

こわい〳〵と思つてゐる中に二時間、三時間と時はたつて、夜になりました。

晝間あれほど白かつた入道雲は、まつかな火にかはつて、今にもこちらへおしよせて來るやうな勢です。

あの火がこちらへ來たら、とてもだめでせう。それに今夜も又大地震が來ると言ふので、とてもこわくて家へは入れません。

今夜は野宿です。

お母様も早逃げる仕度をしてゐる人もあります。お父様も、お母様も『よくを言へばきりがない』とおつしやつて、荷物はあまり出しませんが、ともかくも、きがへを二三枚

つゝんでおきました。
又晝間以上地震でせうか？
なによりそれが心配です。

目ざまし時計

小石川區　金富尋常小學校
第四學年男　宮島夏樹（十年十ヶ月）

私は時計です。私は始め時計屋の店に、色々の形をした友達と一所にゐましたが、或時一人のしんしが來て、いろ〳〵の友達を動かして見てゐましたが、私の所まで來ると、私を取り上げて見て、『この目ざまし時計を下さい』と主人に言ひました。主人は『へい』といつて、私のちりをはらつて、しんしにわたしました。
いよ〳〵私は友達に、わかれをつげて、すみなれた店を後に、しんしの家につきました。しんしの家へ來ると、しんしは奥さんを始め、皆の者に私の体を見せて、『この時計はねぼうの人を起してくれる、目ざまし時計です』といひました。そして、たなの上にのせて下さいました。それから私は毎日休まず、朝から晩まで、かつちん〳〵と音を立ててゐます。皆さん私は何のやくにたつかごぞんじでせう。私は人の最もたいせつな、時間を知らせるのです。そして、もう一つの私のつとめは、人々が朝ねぼうをしないように、起きる時間には、きちんとおこしてやるのです。
しかし私だつて、しぜんに出來たのではありません。昔西洋のガリレオと言ふ人がうんでくだすつたのです。私はせつかくその人が作つて下すつたのだと思つて、毎日休まず、私のつとめをおこたらず働いてゐます。

かなしいひなまつり

小石川區　金富尋常小學校
第四學年女　龜山敦子（十年二ヶ月）

もうひなまつりも近づいたが、私がだいじにしてゐたおひな様は燒けてしまつたので、今年のひなまつりは、何んといつてよいか。
私のだいじの、おだいり様は、私が一つの時、おとう様が買つてくださつたのです。そのだいり様の、かんむりは、金銀、るびゐなどで、かざつてあり、又扇はそうげで、衣服はにしきです。それから、くわんじよや、五人ばやしなど、やはりおとうさんに

買つていただいたのです。それから、たかさごとちんひきは、をば様にいただいたのです。そのたかさごのおぢいさんは、くまでを持つてゐて、おばあさんは、ほうきを持つてゐます。ちんひきはしろい衣服をきて緋の袴をはいて、白と黑の犬をひいてゐましたが、それも皆灰になつてしまつたのです。

ああ、あの時には、おひな様も、どんなにくるしくて泣いてたでせう。あの時には、とりに行かうと思ひましたが、どうしても行かれなかつたのです。おひな様、かんにんしてちようだいね。去年はおひな様をかざつて、内中よろこんでゐたのに、今年は何もなしで、ひなまつりをおくるのかと思ふとたまらなく、かなしくなつてしまひます。それにしても、にくくてわすれられないのはあの大地震です。

大地震

小石川區　御殿町尋常小學校　第四學年男　武田　勇

九月一日のことでした。午前十一時三十分頃、外で三輪車に乘つて居た時、三輪車ぐら〳〵つといつたので、こわれたかと思ふと、こわれたのとはちがつて、大きな地震なのでした。びつくりしてゐると、三輪車がころがり出した。ころがり出したと思ふと赤黑い壁土が煙のやうになつて一寸先も見えなくなりました。すると側の家がぐら〳〵つとつぶれ出しました。自分の内はどうだが見に行かうとすると、角の内のにかいが裏一つぱいはばをとつているものですから、僕の内はつぶれたか、つぶれないのか、わかりませんでした。しかたがないから、大黑屋のおばさんと、妹と、僕と水道橋に來て、そこは、すこしあぶないと言ふので、今度は砲兵工廠の側に來ました。そこに居ると、今度は砲兵工廠の角に火がついたと、言ふので春日町に來ました。すると、おまわりさんが、植物園へにげろと言ひました。植物園に行かうとする時、お父さんにあいました。お父さんはすぐ愛國婦人會に、ねえさんをさがしに行きました。皆と植物園につくと、中に大勢はいつてゐました。そこで一晩休みました。その朝になるとおばさんとお母さんが居ないと、思つていたのに、おばあさんをたんかに乘せて、お母さんが來たので、僕はうれしくて泣きつきました。

ゆれた時

小石川區　御殿町尋常小學校

第四學年女　龍野末子

お晝頃であつた。

みし〳〵と物すごい音が聞えるかと思ふと、

『がらがらつ』

と言ふ物音と共に方々の家がぐら〳〵とまるで、大波の樣に動き出した。

『地震だつ』

『こはいよう』

などと叫ぶ聲が方々から、聞えて來る

とるものもとりあへず、私はお母さんと二人で、植物園へ逃げた。庭の中は、今のおそろしさに、眞青な顏をした人で、うづまつて居た。

『なむあみだぶつ〳〵』

と言ふ聲がすみ〴〵から聞こえる。

少し間をおいては、地面をもりかへすやうなゆるぎに生きた氣もない、ほんとに何もかも、すべてのことを忘れて、唯もとのおだやかさにかへることを祈るばかりであつた。

大地震の思ひ出

小石川區　青柳尋常小學校
第四學年男　本田二郎（十年十ヶ月）

あゝ思ひ出せば恐ろしい、九月一日の大震災大火災だ。

あの時ちようど晝御飯を食べやうとして箸を取つた、其のしゆん間、がら〳〵〳〵ゆらゆらゆらとばかり、物の倒れる音、家のゆれる響が、すさまじい。足もとは、ふら〳〵として歩こうとしても歩けない。

僕の頭には逃げ出す外、何もなかつた。それでむ中になつて、さつと裏庭へ飛び下りた。

其のせつな隣りの、馬屋のかはらが僕の足もとに落ち、二階からも、僕の頭をかすつて落ちた。間もなく、第一震が止んだので恐る〳〵、表庭の方へ行くと、ふばあさんや、お父さんがはだしのまゝ庭の隅の方にかたまつてゐらつしやつた。

家の中を見ると、鏡臺も本箱も倒れてゐて、机の抽出は半ばはみ出してゐる。

僕はふと、おぢいさんはと、見ると、こは如何に家の中で平氣でおせんのそばに坐

つてゐらつしやつた。

皆は『おぢいさん〳〵出て居らつしやい。』『早く〳〵と』とせきたつて言つても、おぢいさんは相變らず落ち附いて『あゝそうかい』とおつしやりながら庭に出て居らつしやつた。おぢいさんは『こういふ場合に落附かなければ駄目だ』とおつしやつた。僕も本當にそうだと思つた。又二度目のゆれかへしが來た。

おぢいさんは『さあ之から小屋を造るのだ。』とおつしやつて、おぢいさんと、お父さんが共力して立ぱな小屋をお造りになつた。

僕達は其處に入つて地震が來たらどうするのかと思つてゐると、おばあさんが澤山ふとんを其の小屋に持ち込んでいらつしやつて『地震が來たら、ずぐ之をかぶるのですよ』と、おつしやつた。

少しの地震でも、それと言ひつゝふとんをかぶる。

僕は今でも其のこつけいな姿は忘れられない。少し時がたつてから餘り地震がこないので外へ出て見ると、下町の方から、むつくり〳〵白い煙りが湧いて來る。

其のものすごいことは、とても口にはあらはせない。

近所の人々は、ざわ〳〵として寄るとさはると、火事のうわさで持ち切つた。僕が三日三晩、野宿してゐる間、其の煙りは絶えなかつた。

後で新聞で見ると、東京の三分の二が燒けたさうだ。其爲死傷者が十數萬人も有つたさうだ。僕は燒けた人、死んだ人に比べると、どの樣に幸福なのだらう。

震災當時の私

小石川區　青柳尋常小學校　第四學年女　有坂貴代（十年十ヶ月）

あゝ思ひ出しても、ぞうとする、大正十二年九月一日、今思つても夢としか思へない。

あの日は丁度繪のけいこ日なので電車の中で女中と二人で一心に好きな本を讀んでゐた。日比谷交叉点にさしかゝると、地震だつ〳〵とさけぶ、あつと思ふ間もなく、電車がぐら〳〵と、はげしくゆれ出した。二人は『どうしやう、早くこゝを出なければ死んでしまふ。』と言ひながら一心に外へ出る氣で、あせつてゐるが、かなしい事には、電車が波の樣にゆれるのと、押されるので、なか〳〵降りられない。やう〳〵のことで飛降りて、ほりばたの木に抱きついた。まだ搖れがやまないので、二人はそこへ、なげつけられた。あまりの痛さにあつと我身に、かへつた時は、前方よりは黑煙

が、もう〳〵と立ち上つて來て、火の子さへもとんでくる。『火事だ――。』とさけぶ聲は、百雷の叫かと思はれる程である。かうしては居られない、早く逃げやうと力を入れて二人は立ち上つたものゝ、身体のふるへはまだ〳〵止まらない。あゝ『我身はどうなつても父様や、母様に一度おあいしたい、逃げるだけ逃げて家へ歸へらう。』と女中を促して見たものゝ足は一歩も出ない。電車は、皆立往生してゐる。氣はます〳〵いら立つて來たが、どうする事も出來ない。見渡せば火は、ます〳〵盛んになるばかりである。どうぞ父様、母様、御無事にと心に祈りつゝ何處ともなく逃げ歩いた。其の中に大地は又もゆれる、『又か』と氣はます〳〵小さくなつた。歩きつかれて、宮城前の芝生に休んだ。思ひだすのは、父様、母様のことである。『あゝ今頃はどうしていらつしやるだらう。』と又もくりかへすのである。足の續くだけ歩いて見ようと二人で決心をし、勇氣を奮つて、火の中を通りぬけて、家近き所までたどり着いたが、そこらは火の海で、家はとても殘つてゐさうもない。『早く逃げよう命が危いから。』と走り出したが走れない、押され押されて思はず人につき當つた。互に顔を見合はせて『あら先生ですか助けて下さい』と、いきなりすがりついた。同じ人は重なり合ふ程あれど、私等の知人は一人もないのに、今偶然にも、こゝで先生に出遇ふことの出來たのは、天の助けか、神の御めぐみかとばかりに嬉し泣きに泣いた。やがて先生は商船學校の方へ逃げやう安全のやうだから、僕と一緒にいらつしやいと手をとつて下さつた。やれうれしいと、いくらか輕い氣になつた。來て見ればこゝも又大勢の人が、逃げて來てゐる。一息つかうと思ふ間もなく、風が變つて火の子は、こちらをむいて飛んで來る。『さあ、こゝもためだー。』と又叫ぶ。あゝ何といふ悲しいことだらう。思へば恐ろしい『かうなれば何も、いらない身輕になつて逃げやう、命さへあればよい。』と今まで大切にしてゐた繪の道具を、すつかり捨てゝ、身一つとなつた。此先は先生の後を追ふて、逃げられるだけ逃げやうと一心に走れるだけ走つた。ついた所はあの月島の相生橋の間にある、小さな島である。此れより先は一歩も出られない。この島は三方は蒼々たる大海で、一方は、火にかこまれてゐる。此處も何萬とも知れぬ避難者が助けを求めてゐる。私はぶる〳〵ふるへながら、女中の手をかたく握りしめてゐた。火は夜更ける程ます〳〵空をおほつてくる。下は黑煙もう〳〵として、目もあけられぬ。もう少しも生きてゐる心地はしない。一夜を此の土の上に横たへて明した。夜は明けたけれど、火はます〳〵はげしくなるばかりである。私のたよつた商船學校は、早や影も形もなく煙と灰になつてしまつた。先生や私等はあまりに、つかれ

たのでそこで一睡した。目のさめた頃は、火はもう近傍をやけつくしてゐた。あゝ父様、母様は生きてゐらつしやるだらうか、一目でも遇ひたひ、どうしても父様母様をさがし出さなければならないと、又も二人はぶら〳〵とあてもなくあちらこちらを探したづねた。けれどもこいしい父母の居所どころか、知人にさへ遇はない。日はもうとつぷり暮れた。先生のもとへはとても遠くて歸れない、二人は泣くに泣かれず。又もそこらをさがしまはつてゐる。其の矢先ふと目の前に知り合ひの人が、私等二人を見つけて『あら貴代子さん』と呼んだ。私は一言も言ふ事が出來ず、あゝと泣きついたばかりである。『父様、母様のゐらつしやる所を敎へて上げますから一緒に早くいらつしやいませ』といふ。二人は今までのつかれも打わすれて、嬉び勇んでその人の後について砂村まで來たが、先は眞暗で進むことが出來ない、殘念ながら一夜をそこの青年だんの小屋に明した。翌日父母の居られる所へついたが、此處も何萬と知れぬ避難者でとても見當りさうもない、其の中に髮のこはれた、黑い顏の人が私にとびついた。誰かと見れば母上である。『あつ』と抱きついたまゝ聲を立てゝ、二人は泣いた。父もとんできて、私のからだをかゝへて下さつた。別れてから丁度三日目で、私は父母の顏を見たのである。其の時の嬉しさは、とても筆にも、紙にも、書きあらはすことが出來ない。今は打ちそろつて、たのしく暮してゐる。

僕の弟

小石川區　指ヶ谷尋常小學校　第四學年男　竹松正二

僕の弟は時々いたずらをして困る。

或日學校から歸つて見ると、いつの間にか本箱のふたが開いてゐて、中のせいとんが目茶〳〵になつてゐる。『又弟のやつ、いたづらをしたな。』と思ひながらかばんを下して、ふとそばを見ると、弟のやつめそこで、何かしてゐる。見ると、昨日買つたばかりの少年倶樂部に、鉛筆で盛にいたづらをしてゐる。

いつもじつと、がまんをしてゐた僕も、此の時ばかりは腹が立つて、となりの座敷にいらつしやつた、お母さんに、うんと弟の事を惡く言ひつけてやつた。

お母さんが弟を呼ばうとしたら、其の時早くも、弟は本を持つたまゝ外へ飛出してどん〳〵逃げて行く。僕は腹もたつたが、まだはかまもぬがないので、追ひかけもしなかつた。

それから、今日のおさらひをすまして、お母さんのお部屋に行つて見ると、いつの間に歸つて來たのか、弟はお母さんにだかれて、むじやきな顔をして、すや〳〵眠つてゐた。お母さんに聞くと、あれから少し立つて、そつと裏からはいつて來たと言ふ。そばには少年倶樂部が、くしや〳〵になつて投げてあつた。

さくら咲く頃

小石川區　指ケ谷尋常小學校
第四學年女　石川美津枝

長い冬の眠りからさめた、草や木が氣持のよい風に吹かれて、勢よく芽を出して來る。野山には、小鳥がうれしさうに春の樂しさを知らせる。ひら〳〵とまふ蝶に案内されて。野原に出て見ると、れんげ草や、すみれ草の、かはいゝ花が、今こそと言ふ樣な顔をして、せい一ぱいおけしやうをして居る。向ふの方に、かすみの樣に見えるのは、櫻の花であらう。近くのどてにも、二三本今を盛りと咲いてゐる。はら〳〵とまひ上つてはちるのを見て居ると、心がせい〳〵として、空にでも上つた樣な氣がする。私は櫻の咲く頃か一番すきである。

魚屋

小石川區　大塚尋常小學校
第四學年男　猪川敏郎（十年二ヶ月）

『七十錢は高い、五十錢にまけとけ』

どこかのおぢいさんがしきりに、魚をねぎつてゐる。その魚屋は僕の家へよく魚を賣りに來る魚屋だ。

『じやうだんぢやありませんよ、五十錢では元がきれまさあ』

『そんなことがあるもんか、まけとけといふのに』

『ぢや六十錢にしときませう』

『そんなことは言はずにまけとけ、朝商ひだ』

『では大勉强で五十五錢までにしときませう』

『けちくさい魚屋だなあ、ぢやよそう』

おぢいさんは口の中で何かぶつ〳〵いひながら歸りかけた。すると魚屋は、

『ようござんす、五十錢にしときませう』

おぢいさんは笑ひながら、大勝利といつたやうな顔をして、後へもどつて來て、小ぶなを二匹買つて行つた。

五十錢に
　うつてどうだい
　　魚屋さん。
チエーまけておけ
　　五十錢。
おぢいさんのお顔
　ニコニコだ。

お風呂で

小石川區　大塚尋常小學校
第四學年女　花形よし子（十年八ヶ月）

私がお湯から出て、着物をきてゐましたら、可愛い男の子が、頭でお船をこいでゐました。

そのうちに大波にゆられて居るやうに、頭をあつちへこつくり、こつちへ、こつくりして、しまひに、かゞみのこばに、ぶつつけて、びつくりして、だまつて上を見上げました。着物をきて居た人も、ぬいで居た人も、私も、皆笑ひ出しました。

すると男の子は、おこつたやうな顔をして居ましたが、又居眠りをはじめました。

そこへお母さんらしい人が來て、

『お前のもゝひきは、どこへやつたの』

とたづねますと子供は

『こゝにあるよう』

と言つて、目をぱちくり〳〵させながら、立上がつて、よろ〳〵しながら、もゝひきを取りに行きました。

そして子供は着物を、お母さんにきせていたゞいて、お風呂屋を出て行きました。

私はあとであの時、笑はなければよかつたと後悔をしました。

恐しかつたあの日

小石川區　駕籠町尋常小學校

第四學年男　川井　保（十年七ヶ月）

二學期の始業式はすんだ。今度こそは一生けんめい勉強しやうと、かんがへながら家にかへつた。それからまもなくであつた。とつぜんづしんと持ち上げられたと思ふまに、すべての物がぐらぐらと、左右にゆれ出した。

物すごい地ひゞき、かべのおちる音

僕はただ恐しさに生きたきもちもなく柱に、つかまつてぶるぶるふるへてゐた時、お庭からお母さんの『芝生は安全だからはやく！〜』と言ふ聲が聞えた。

僕はむちゆうで、お庭へ逃げた。そこには皆まつさほなかほをしてたつてゐた。

大きなじしんはやんだ。安政の大地震をしつてゐるおばあさんは、もう大きいのはないだらうから、大じようぶだよ、とおつしやつたので一安心した。しかし水道の栓をねぢつてみれば、一てきもでず、電氣はいつつくかわからない。これからどうなる事かと、又しんぱいになつた。

お父さんは、夕方になつても、まだかへつてもいらつしやらなかつたので、案じてゐたら、九時すぎにかへつてこられたので皆でおほよろこびをした。

もうそのころは東の空が眞赤であつた。

下町一たいは火につつまれてゐるのだ。水もないのに、いつ火事はきえるであらう。文明の力もしぜんにはかなはないのだ。

かうして恐しいうちに九月一日はいつてしまつた。

大震災を思つて

小石川區　駕籠町尋常小學校　第四學年男　金子正雄（十年）

大正十二年九月一日午前十時半頃、僕が學校の式から歸ると、すぐ晝ねをしてしまつた。目をひらいた時は、家の前の四ッ角に、大勢の近所の人々と共に立つてゐた。どうしたのかと思つて、母に尋ねてゐると、同時に母は『そら來た』と言つて僕をだきしめた。

其の時、初めて地震だと知つた。其れから何べんも、何べんも、來るので、とても家にはいることが出來ず、すこしはなれた野原へ他の人とひなんした。その中に下町の方が火事であると言ふので、にげて來る人々は、色々なすがたで、巣鴨の方へ行く。東の方の灰色空の中には、白や黑の雲が、雷樣のなる時のやうに、ふそろしく、む

く〳〵と上つて來る。其の中に日が暮れたが、電燈はなし、水道の水もなく、にぎりめしを食べて、おそろしい、おそろしいと思ひながら眠つた。それから、二日ばかり野原のてんとの中に居た。世の中が、だん〳〵とさわがしくなつて來て、水はなし、食物もなくなつて來るといふので、少しの食物も大切に食べた。

其の中に日本國中から、食物を送つてくれたり、又、世界の國々から、食物をばじめ色々な、品物を送つてくれたので、不自由もわづかの間で、うまいものをいただけるやうになつた。全くあの時の事を思ふと、どんな物でも、うまくいただかねばならないと思ふ。

大地震

小石川區　林町尋常小學校
第四學年男　齊藤清三郎（十一才）

長かつた夏休ももう濟んでしまつたと思ひながら、九月一日をむかへました。起きて見ると、外にはしと〳〵と雨が降つてゐて、何と無くもう秋になつたやうなすゞしさを、身に感じました。今日から學校が始るのだと思ひながら、支度をして學校へ行きました。

學校で式を濟ませて家へ歸つて來ました。その頃空は晴れて、氣持のいゝ秋の日となりました。晝御飯を濟ませて、私は角のパン屋まで、買物に行きました。そうして、パンを買ひ、家に歸りました。ちようどその時下から、ドシン〳〵と家を突上げたので、お母さんが『地震だ』とおつしやつた時、急に激くゆれだしたので、私は玄關口から、急いで外へ飛出しました。

外へ出て見ると方々の家から、人がどや〳〵と出て來ました。私は家の前に立つて、家を見てゐると、家がぎし〳〵音を立てゝ向へかしぐかと思ふと、こつちへかしぎ、今にも倒れさうでしたが、地震がしづまるに連れて、だん〳〵と元のやうになりました。

震動がしづまつてから、私はあたりの樣子に驚きました、家のくらの土が、ほとんど全部落ちて、目もあてられない程、ひどくなつて居りました。

その中二度目の激震が來ました、それと同時に、家の藏の鬼がはらが、恐しい音を立てゝ落ちて來ました。私は此所に居ると、どんな目に會ふか、わからないと思つて、皆で徳川樣の竹やぶに、はいりました。二時頃になると、東の空に白雲の樣な物が現

れました。

私は始、雲だと思つて居りましたが、後で火事だといふ事がわかりました。その中、火事場から逃げて來た人々の話によると、『一番近いのは春日町の砲兵工廠だ』といふ話でした。その中東の方は、眞赤な空になつて、時が立つに連れて、ます〳〵赤くなつて、今にも空が燒けてしまふのかと、思はれるばかりになりました。私はこはくてどうしても、寢られませんでした。その中九月二日の朝となりました。東の方を見ると、火勢は餘程しづまつた樣ですが、まだ黑煙が、氣味惡く上つて、ずい分氣持が惡かつたのでした。

三日には火も消へ、四日五日には電燈がつき、六日七日と日がたつ中、餘震は大分しづまつて來ました。それから四十餘日も休んで居た學校も始り、私どもは勉强が出きるやうになりました。

その中日數が立ち、いよ〳〵新年をむかへることゝなりました。私たちから考へると燒出されの人々への、同情にたへません。たとへ何なりとも、これらの人々のためになる物を贈つて、やりたひと思つて居ます。

それから、この東京を復興させやうと思つて、一しやうけんめいに勉强をして、そして今度の樣な、大地震が來ても、前の樣な大火事や大勢の人の死ぬ樣なことの無い、立派な大東京を造らうと思つて居ます。

大地震と大火事

小石川區　林町尋常小學校
第四學年女　牛島　しん（十二才）

丁度私がお友だちの春子さんの家に遊びに行つて、おばさんから、安政の大地震のお話をきいてゐた時でした。

にはかに家がぐら〳〵つと動いて、たなのものも落ちはじめましたので、私が『地震よ』といつてゐる間に、だん〳〵ひどくゆれて來たので、おばさんが表へ出なさいと云つたので、私と春子さんと表へ飛出しました。おばさんの前の家の吉雄さんと云ふ男の子と、二人は出おくれてつぶされてしまひました。

私は、こはいので、たゞむ中で、家の方へかけだしていつて見ましたら、私の家はぴしやんこにつぶれてゐました。私はあまり悲しいので、涙さえ出ませんでした。

『お母さんは、どうなさつたかしら』と思ひながら家根の瓦をめくつてゐましたら、

お隣のおばさんが來て『お母さんは裏の家に居らつしやる』といふことを聞きましたので、私は急いで裏へ行かうとしましたら、お父さんが頭から、血をたら〳〵たらしながら家の中から出て來ましたので、お父さんと一所に裏へ行つて見ました。すると、石屋のそばに、お母さんと弟が居ましたので、飛上るほど、うれしゆうございました。

その中にみんなが『火事だ〳〵』と言ふので向ふを見ると、どん〳〵もえてゐるので私はびつくりして『火事だから、早く逃げませう』と言つたけれどもみんながはだしなので、家の中へはいつて、急いでざうりをはいて來ました。そうして、むがむ中で汽車の線路の上まで逃げて來ました。けれどもだん〳〵火の手が早くなつて來ましたので、もう四方八方火で逃げる所がありませんでした。あついのも、がまんして線路の上にしやがんでゐました。

その中につむじ風が吹いて來て、私は吹きとばされてしまひました、そうして、よその家の裏へ吹きとばされてしまひました。そうすると頭の上へ、大きな棒がおつこちて來ました。

そうすると大へんな、さはぎになつて、まよひどの子供も出來れば、又子供の名をよんで泣きながらさがす人もありました。

私はお母さんは、どうなさつたかしらと思ひながら、又線路の上へ行つて見ましたらお母さんは、なんにも出さないので、どこからか飛んで來たこりをかぶつてゐました。それから、だん〳〵日がくれて來ましたので、こんどは天王樣へ行きました。私のその夜は、飲まず食はずに、夜をあかしました。それから翌日又汽車の線路の上に行つて、三晩夜をあかしました。三日間と云ふものは、やつぱり飲まず食はずに居ました。それから四日目の朝、燒跡へ行つて見ると、まるで一面の燒野原となつて、もうもと居た家のかげも形も見えません。

私はその時やけない前のことを考ると、悲しくなつて來て、ひとりでに涙がこぼれて來ました。

それから、いく日かすぎて、お父さんが、小石川の家はどうか、行つて見ようと云つたので、みんなで小石川の家へ來て見たら、なんともありませんで、よろこびました。それから私はこの林町の學校にあがりました。みな樣の同情によつてなに不自由なく學校に通つてをります。又先生や、お友だちに、いろ〳〵おせわになつておりますのでいつしようけんめいに勉强して、早く皆樣へ御恩返しをしようと思つてをります。

又この寒もしのぐことも出來ました。
みな樣の御恩は一生忘れません。

大震大火の思ひ出

本郷區　湯島尋常小學校
第四學年男　平野良助（十二才）

あの恐しい九月一日、僕はお店でたなおろしのてつだいをして居た。突然ガタ／＼とがらすはこはれる、品物はたふれる、家は動く、その音が一つになつてゴウ／＼と聞えるばかりであつた。僕と父とはすぐ往來へとび出した。往來には澤山の人がうろ／＼して、地にかぢりついて居るのもあつた、ないて居る子供たちも居た。僕のお店と隣のお店とが、はち合せをして居るのを見て、どうなることかと、たゞおどろくばかりであつた。少し靜まつてから、やつとお家のみんなをたづねて、お庭に居らつしやるのを見つけた。お婆さんは、おざしきになにかしらべて居らつしやるし、おぢいさんは品物を、なほしたり、かたづけたりして居らつしやる。お母さんは赤ちやんをおぶつて、親類の塚谷のおばさんと、一所にもちの木のそばに立つて居らつしやる。

兄さんと、弟とは井筒の前の飛石にしやがんで居るので、僕もそこへとしやがんだ。そのうちに何度も／＼ゴー／＼と、地震がやつてきた、そのたんびにどこともなく、いやな人の聲が聞えた。

消防のかねがなり出した。天を見ると、大きな黑い煙が、空一ぱいにこつちへなびいて居る。火事だ／＼と、人がさわいだ。『いよいよ大へんな事になつて來た。ともかく逃げねばならぬ。』と父の命令で、シャツ一枚の僕達は、單衣ものと着かへた。それから、かばんとまんとと、かさとを自分々々で持つて、父母に連れられて、大學の運動場へ逃げて行つた。大學では、かなりの人であつた。あちこちと、場所をさがしまはる中に、大學の建物も、又燒けだして、けむくてとても居られないが、外科の前の草原へと落ちついた。

お店の人の持て來てくれる、うすべりをそこへしいた。いろ／＼のにもつを、圓形にかさねた。お鉢がきた、箸がきた、茶碗がきた、おゆのはいつた、やくはんがきた。やつとおひるのごはんを丸い中でたべたのであつた。方々から、逃げてくる人が、夜具をしよつたり、ふろしきをかゝへたり、それは／＼大へんなものであつた。

僕達は、たゞ大勢の人の、こんざつを見て居るばかりであつた。

そして、このたいくつな、恐しい日がくれた。南と東とは、一面の火が見える、地震は、やはり時々やつてくる。そのこはい中に、蚊に食はれるのも、蟻にさゝれるのも知らずにねてしまつた。夜十時頃、僕のお店も藏もざしきも、みんなやけてしまつたさうだ。ほんとうにやけてしまつたのだ。

宿なしの僕らは、二晩この草の上でねた。三日目の午後、雨がぽつ〳〵ふつてくる前に、うまく龍岡町の說敎所へはいる事が出來た。あの數多い草原の人達は、どうしただらう。

それから毎日、小石川の親類へ、ごはんをもらいに行つた。そうして毎日、げん米のおかゆを食べねばならなかつた。本所深川の方では、もつと〳〵ひどかつたそうである。僕はまだ〳〵、そんなしあはせを喜ばねばならないと、聞かされた。僕の家ではすぐにお店を建てるといふので、お父さんや、みんなが、土方をするやら、車をひくやら、一生けんめい、お働きになつた。七十日目にやつと家ができて、十一月十日に引越した。僕の家はバラックである、そまつなせまいバラックである。それでも鷄は居る。運動場はある。日あたりはよし、木もうえた、ここで遊んだりして學校へ通つて居る。僕は大きくなつて、立派な人にならねばならぬ。立派な人になつて僕達の大東京を造らねばならぬ。

東京の復興

本郷區　湯島尋常小學校
第四學年女　田中玉子（十一才）

日本一の東京が
　夢にも思はぬ天のわざ
九月始めの地震火事
　家は倒れて火を出し
大地はさけて人は死す
　我東京は丸つぶれ
昨日の榮え今日は夢
　實にあはれな其の姿
かはいさうなは避難民
　家は燒かれ衣類なく
此寒空にふるへてる

やつれ姿の東京も
トタンでふいたバラックで
もはや市中は一面に
見渡す限り銀世界
あの淺草もにぎやかに
觀音堂へ行く人も
復興祈りに行くのでせう
あゝうれしい我都
復興氣分がみなぎつて
次第々々に復興す

大震火災

本郷區　誠之尋常小學校
第四學年男　村上嘉男

あゝ九月一日と言へば誰も知らない者はない。關東地方の幾百萬の同胞を、みじめな目にした、大震火災の起つた其日である。

其日の午前私は長い夏休をおへて、校長先生からの貴い御教訓をきいて、二學期にたいする考をきめた。

秋は天高く馬がこえる樣なよい時候で、昔から燈火親しむべしと、いはれて居る。是非とも、一心にやらうと思つた。學校からかへつて、千葉さんと將棋をして居ると、一時に凄じいひびきと共にガタ〳〵ゆれ出した。

十秒二十秒だん〳〵大きくなつて來る。思はず、おどろいて、外へ飛出した。後の寺の本堂が、地ひびきを立ててくづれる。あゝ何んといふ物すごい光景だらう。又も强震が起つた。前のれんぐわ造りの教會が、ゆらり〳〵ゆるのを見ると、生きた心持はしない。ふと首を上げて見ると、みなみの空が赤黑く見える。大學が火事といふうわさだ。

學生の人がかけつける。ポンプの音がきこえる。其中に小石川の火事、神田の火事、吉原の火事、などのうわさが耳にはいる。

夕方になると、空一面の雲が、だん〳〵黑くなり、赤くなり、夜になると都の空が眞

赤になつた。この世の生地獄を見てゐる我々は、本當に眠る事も出事ず、なさけない一夜をまんじりともせず、かたりあかした。

地震と火事

本郷區　誠之尋常小學校　第四學年女　坂田勝子

大正十二年九月一日は、思ひ出しても、恐しい大地震大火事のあつた日であります。

長い夏休も終り、今年の秋に行はせられる、攝政宮殿下の御こんぎの御祝ひの事や、れん合うんどう會の、樂しい事を思ひ浮べながら、九月一日の朝元氣良く急いで、學校に行きました。誰でも恐しい、大ぢしん、大火事が今日おこらうとは夢にも、思はなかつたのでありませう。

第二學期の始業式もおはつて、學校から歸つて、お友達と遊んで居ると、ねえちやんが『もうお晝の御飯です』と呼んだので家へ入らうとしました。ちやうど午前十一時五十八分四十秒、にはかに起つた、大地震、天地もくつがへらんばかり、大地も、家も、『ぐら〳〵』と動き出し、かはらの屋根は落ち、れんぐわのへいは倒れ、お倉の屋根はくづれ、外へ飛び出す人、屋根の上に上つて居る人、丈夫な物の下にしやがんで居る人の樣子はきちがひの人のやうで、青ざめた顏色驚いた顏附、何んともたとへやうがありません。私は夢中で、前のあやちやんの家へ、かけ込んで、二人は言合はしたやうに、大きな機械の下へ、逃込んで、生きたこゝちもなく、ふるへてをりました。

家でも、皆大變驚いて、お家に居なかつた、私の事を大層心配して、私の名を呼んでさがして居ました。始めの地震がすむと、皆一時に外へ出られた。さうして、第一に私が無事であつた事を、喜んで下さつた。近所の人々も、皆お家の外へ出て、こはれたへいや、屋根や、ガラス、落ちたお倉などをながめながら、驚いた樣子で、恐しかつた事を話し合つてゐました。小さい子供は、こはがつて、お母さんのそばへよりついてゐました。地震が少し弱くなつたので、廣い電車通りへ出ると、又大きな、地震があつて、どうしても急いで歩けません。やつと元町の、水道ぶへいつて、よその人から、ござをかりて、皆ですはつてゐると、逃げて來る人でたちまち一ぱいになりました。

ふと神田の方を見ると、大へんな大火事で、本郷の方へ風が吹いて來るので、火の粉が飛んで來て、空一面に煙になつて、太陽は眞赤に見えました。『どんどん』『ぼんぼん』とはれつする音、今にも燒けて來さうなやうす、時々起る地震に驚かされ、そこに集つた何千といふ人々は、顏色は青ざめて、まなこは血ばしり、生きてゐるやうな氣持はしませんでした。午後三時頃、ほうへいこうしやうの方から、本郷へ火がもえうつつたので、そこにはゐられなくなつて、上野の池のはたの方へ逃げました。本郷の電車通へ出ると、大きなふろしき包をしよつてゐる人、こりをかついで逃げる人、車にたんすや色々な物をつんで走る人で、一ぱいになつて、あぶなくて、とてもあるけません。やつとの事で池のはたに着きました。その時は逃げ出した人や、荷物で一ぱいになつてゐて、歩く所もなくやつとあいてゐる所へ、むしろをしいて休むことの出來たのは、夜の十一時頃でした。東京の町は一面に火の海になつて、淺草や、本所深川、神田、下谷など三方からだんだん燒けてきて、夜でも晝のやうに、空は眞赤になつて、火の粉は雨あられのやうに、飛散つて、物すごい有樣は、何んともたとへやうはありません。時のたつにつれて、火事がだんだん近づいて、池のはたも、あぶなくなつて恐しくなり、お腹がすいても、御飯もろくに食べられまい。皆んなで、こはいと言つてゐる中に、恐しい一夜は明け始めました。けれども火の勢は、ます〳〵盛んになつて、東京中が燒けてしまはなければ、やみさうでもありません。池のはたもあぶなくなつたので、二日の朝本郷學校にひなんしました。

心はやつとおちついたけれども、お腹がすいても、食べる物は何んにもなく、のどがかはいて飲む一てきの水さへありません。火事は今朝よりも、一そう盛になつて、大陽は煙で眞赤になつて、空は一面に火の煙で一ぱいになつてゐました。二日も、だんだん夕方になつてくるにつれて、下谷の方から火事が、本郷の方へ、もえうつつてくるので、今ゐる所もあぶなくなつてきました。午後八時頃、松坂屋も燒け落ち、ます〳〵本郷の方へむかつてくるので、皆んな燒けない方へと逃げ出しました。私達も、燒跡の方へ逃げました。二日の夜は燒け落ちて、まだもえきれない熱い煙の中で一夜を明かしました、三日はまだ火事がやみません、時々おこる地震のため、少しも氣が落ちつきません。三日の夕方火事は大方おさまつたので、また本郷學校へ、ひなんしました。ばんになると、〇〇〇人のさはぎで、大變おそろしく、戰爭のやうなさはぎで、人々の驚きはなほ一層でした、男の人は少しもねないで、夜警をして、時々『やあ〇〇〇人だ』『やつつけろ』といふ聲で皆なさはいで、中々落ちつきません。けれど

もからだがつかれ、ろくに御飯も食べないので、そんなさはぎを聞きながら、ねむりにつきました。夜中におこる銃聲、又〇〇〇人があらはれたのでせう。地震や火事の恐しかつたこと、〇〇人のさはぎのこわかつたことを、思ひ浮べながら、學校の教室で、いつの間にかねむつてしまひました。いつになつたら、自分のお家へゆつくりねる事が出來るであらふと思ふと、悲しくなりました。それから一月餘り學校にゐて、十月の初め頃やつと『バラック』が出來て自分のお家へ歸へりました。

恐ろしかつた

本郷區　本郷尋常小學校
第四學年男　大月一郎（十二才）

大正十二年九月一日午前十一時五十八分にガタ〳〵と地震がきたので、お母さんはえい子を横だきにだいて、庭へ飛び出しました。その中に、地震はます〳〵強くなつて來ました。家の中の物は、皆たたみの上へころがり落ちました。

その中にお父さんがきて『岩崎さんのいてふの、木の下へ行きなさい。』と言つたので、僕はすぐえい子を連れて、いてふの木の下へ行きました。その中に火事が、方々から始りまして、一はお茶の水附近から、湯島の方まで燒けて來ました。又一方は淺草の方から廣小路を燒き、岩崎さんの表門の前まで、燒けて來ました。

此の時に、火のこが岩崎さんの家の屋根へたくさん落ちましたので、大勢の人は皆びつくりして逃げ出すやら、その中にじゆんさたちが『もうここも、あぶないから逃げろ。』と言つて、ぴりぴりをふきました。その間にも何べんも地震がきました。又泣くやら、さわぐやら、大變でした。その中に火事は、だん〳〵下火になつて來ましたので、安心して四日目に家へ歸りました。

帝都復興

本郷區　本郷尋常小學校
第四學年女　淺井ケイ（十二才）

『陽はてるるりの空の下』

あゝどこかで、帝都復興の歌を歌つてゐます。

明治天皇の、とほときお力によつて、きづき上げられた、大都會も大正十二年九月一日の災難の爲に、元の武藏野の原にます燒野ヶ原にかへつて、しまひました。あの時

分にはこんなに燒けてしまつた、大都會がいつになつたら、元の東京になるのかと思ふとなんとなく、心ぼそく思ひました。

所がどうでせう、一月二月たつ中には、方々でうちならす槌の音と共に、復興の町はだんだんと出來上りかけて來ましたが、まだまだ元の樣なりつぱな東京になるのは幾年の後の事でせうか。しかし失望することはありません。

亞米利加の大都會サンフランシスコも、我が東京の樣な災難にあつて、一度は燒野原となりましたが、其後人々の力によつて、前よりももつと／＼りつぱな、大都會となつたといふ話も聞いてをります。

外國でもそんなにりつぱな都會が出來たのですから、我が日本は外國よりも、より以上りつぱな東京にしなければなりません。

又世界にほこる街をこしらへねばなりません。聞けば此の度の天災の爲には、日本の國では日露戰爭以上の損害であると言ふ事ですから、それにつけても、老人といはず、子供といはず、皆そろつて、ど力をそゝいで、りつぱな東京をきづき上げなければなりません。

ことに我等第二の國民は、しつそ、けんやくをむねとして、自分のつとめを守つて國の爲につくし、一時も早く世界にほこるべき、街を立てる精神を持つて勉强しなければなりません。

弱い人間の力

本郷區　駒本尋常小學校
第四學年男　松本榮祐（十一才）

今の私共は地震がくると、地震／＼といつてさはぐ、そして近い内に、大地震があるなどといふと、びく／＼して仕事も手につかぬ有樣だ、まだ／＼人間の力は弱い。けれども人間の智識は、みがけばみがくほど、光をまして來ることは、自分も知つてゐる。

何千年か何百年かの後には地震について、よく研究が出來ると思ふ、空には飛行機、海には潛行艇といふ樣に、昔の人の夢にも思はなかつた事が、人間の頭から考へ出されて、鳥のやうに空をとび、魚の樣に人間が自由に水中を走る事が出來るやうになつた。

これから後、又どんなすばらしい事が、出來るかわからない。

人間の智識はすごいものである。こんどは地下鐵道を、世界中に引く事になるでせう。又空をとぶ、陸をはしる、海をはしると云ふものも出來ると思ふ。

これから先、人間はどんなすばらしい物をこしらへるかわかりません。又戰爭の道具にも色々の都合のよいものが出來、又戰爭も出來なくなるかも知れない。

色々な道具や機械が、數限りないほど出來、又物と物とを合せて、新しい色々の物が發明できる。我々はこれからなほ一層勉强したら、どんなりつぱな國が出來るでせう。

又世界中の人が、皆氣をそろへて、共同一致をして、お互に助け合つて行けば、いつの間にかりつぱな、平和な世界が出來ませう。

さうすれば世界中の人は喜びます。

私共少年は少年だけで、なほ勉强して、りつぱな國をつくらなければならない。

帝都復興について私の希望

本郷區　駒本尋常小學校
第四學年女　鈴木スヾ子（十一才）

大正十二年九月一日の大地震と大火事に東京の繁華な町は、大程灰に化してしまつて、殘つてゐるのは、さびしい所ばかりであります。

日本は地震國でありますから、從つて、地震が多く、時々ゆれだしては人を驚かします。

燒けだされた人も、だん〳〵自分の元居た所にかへり、そこへバラックを建てゝ、住むやうになりました。女の人達は、毛糸で手袋や、ジャケツをあんで、それを着たりしてゐます。

震災前の家はたいてい、木造であつたので、あんなあはれなすがたとなつたのであると、私は思ひます。

そしてお父さんに、地震や、火事に、耐えられるものがあるのと、たずねましたら、お父さんが鐵筋コンクリートなら、大丈夫だらうと、おつしやいましたから、私は大きくなつてから、コンクリートの家を造らうと思つてゐます。

米國では木造の家などはなく、みんな石造りや、煉瓦造りや、丈夫な鐵筋コンクリート造りでありますから、大火事には耐えられます。

商店はのきを並べて、夜でもたくさんの電氣光て晝の樣に明るくかゞやいて居ます。

道路は木煉瓦や、タークレーを、敷きつめてありますから、東京の樣な、あのひどい砂ほこりもたちませんから、愉快に町を歩く事が出來ます。電車も地中を走つてゐますし、そして人々がきまりをよく守つてゐますので、乘り降りに、東京で見られるやうな、けんくわはありません。

私は復興後の東京を、この米國のやうな、りつぱな町にしたいと思つて居ます。

國は小さくも國民が、まじめで熱心であつたら、後には世界中で一ばんの、かしこい國となり。東京市は世界のお手本となるやうなりつぱな町になるでせう、私はそれを望んでゐます。

大震災大火災

本郷區　富士前尋常小學校　第四學年男　工藤　新

隣の室でお母樣たちが、御飯を食べてゐらつしやつた。

十一時五十八分、時計の針がさした時、「ガタ〳〵〳〵〳〵、ミリ〳〵〳〵〳〵」「おや〳〵地震だな、たいした事はないだらう」と思つてゐると、だん〳〵ひどくなつて來た。いそいで隣の室にかけて行つた。電氣が左右にうごく、おば樣は、電氣を、とめやうとなさつて、お立ちになつた、よろ〳〵とたほれそうになつた。向ふの電線がゆら〳〵と動く、一時つぶれるかと思つた。第一回の地震は終つたが、すぐに第二回の地震、いそいでたんすのかげに行つた。地震はやんだ。

お母樣がすぐに、銀行に電話をかけて見ると、もう電話は通じない。みんな外に出た。

ゆれかへしがある度に、「わあ」と言つて、方々の家では外に飛出す。其の中に火事のうわさがたつた。丁度三時頃だつた、一方は本所、深川の方面、一方は万世橋の方面から來る、恐ろしいけむりがだん〳〵こつちの方に來る。始めは、ニュードウ雲かと思つた、其の煙の間に赤い火が見える、近所の人たちが色々話し合つてゐる。家の大門をあけて地震があると、すぐ飛出すやうにした。

おやつをいたゞいたが、胸を通らない。夜の御はんもいそいで食べて外へ出た。電氣はつかないし、ガスはとまるし、其の上水道まで水が出なくなつてしまつた。

其の中に○○がつけ火をするとか、だいなまいとを、はうると云ふので大さわぎ、すぐに夜けいが始まつた。

お父様はまだ銀行から歸つてゐらつしやらない、家内一同の心配は一通りでなかつた其の中火事は近くなる。一日は内でねないで、外へ出てゐた。お父様のお歸りがおそいので、心配で夜もろく〳〵眠れなかつた、こうさてんの所へ行つて見ると、向ふの空がまつかだつた、坂下の方からひなん者の群が、幾人も、幾人も、つゞいて來る、火事が近くなれば、家も燒けるのかと、名ごりおしさに家を見まわした。家はさびしさうに立つてゐた、

自動車が幾だいとなく通る。自動車が來る度に、お父様がのつてゐらつしやらないかと中をのぞく、何だい待つてものつてゐらつしやらない、ひなん者の群は後から〳〵つゞいてくる。

おそろしかつた、今から考へても思ひ出す。

りつぱな日本にするかくご

本郷區　富士前尋常小學校
第四學年女　齋藤美喜

去年の大震火災で、日本が一等國ではなくなつた。

此の日本を元通りにするのは、どうしても私たちでなければならない。私たちはこれから一しやうけんめいではたらいて、此の日本を先よりももつと〳〵よい國にしなければならない。

我々日本人は、ます〳〵体をきたへて、外の國に負ない樣に、しなければならない。この間皇太子殿下が御成婚あそばして、我が日本人は勇んで、帝都の復興に取かゝつてゐます。

皆さんもどうか、日本を元の通りにする樣心がけて下さい。

大地震

本郷區　根津尋常小學校
第四學年男　小野武志

長いと思つた、三十日の夏休は、夢のやうにすんだ。そうして、九月一日となつた。僕は、學校に行つて、校長先生の、お話を聞いて、家へ歸つた。家では母が、こしがいたいからねてゐた。僕は晝御飯を食べようと、すると『がた〳〵』と家が持上るやうな氣がした。その中大地震とかはつた。母は『武ちややん、早く來て清ちんをおん

ぶ、しなさい。』僕は無我無中で、かけつけた。母はおびで、おぶせてくれた。もう母は、氣ちがいのやうに、なつて『まんじやらく〳〵』と、おがんでゐた、僕はまつたく、生きた心持がなかつた、『がた〳〵、がちや、がちやん』と大きな音がする、その度に、『まんじやらく〳〵』といふ。僕はたまらなくなつて、外へ飛び出した。そうして、となりの平山さんの庭へ逃げこんだ。人々はみんな生きた心持がなかつた。ただ青い顔して、神樣をおがんでゐるばかりであつた。僕の心臟は『どきどき』してゐる。赤ん坊は、にこ〳〵わらつてゐる。弟の晃は、平氣の平左衛門で『大地震だね』それだけいつて、あとは、何もいはない、僕は、このごうたんに驚いた。その中、火事だ〳〵と、誰かがさけんだ。僕はここで死ぬのかと考へた。こゝで死ぬのはつまらない、兩親のそばで、死にたいと思つて居た。仕合に、風むきがかはつたので安心でした。後で聞けばあの大火事で、死んだ人が澤山ある。死んだ人は、なによりかはいさうなので、目からあつい涙が出た。

可愛い笑子ちやん

本郷區　根津尋常小學校　第四學年女　室山勝子

黑いきれいな髪をおかつぱさんにして、赤いりぼんをよこに結んだ。笑子ちやんはほんとうにかはいらしうございます。いつも二階から白いお顏をぽつかり出して、かはいらしい聲をして、歌をうたつてをります。いつも、そばを通る人は思はず、笑子ちやんを見て、ほゝえんで通ります。近所の人々もみんな、笑子ちやんの事を『まるでお人形さんのやうですね』とうわさをしております。笑子ちやんのお母さんもほんとうにやさしくて、内のぼうやがいきますと『勇ちやんはほんとうに、おりこちやんね、中へ入つておあそびなさい』とやさしくおつしやいます。笑子ちやんは、ほんとうに、かはいらしうございます。

玄米飯を食つて

本郷區　追分尋常小學校　第四學年女　榮井万壽子

わすれもしない九月一日午前十一時五十八分を、少し過ぎたばかり、その時私は着物をぬいでゐた所であつた。家がゆれだしたので驚いて、

「そら地震だ」

とさけんだのは私、急いで着物をひつかけ、たんすの前へかけつけた。たんすとともに前後にゆれる。体は、ひつくりかへりさうだつた。

ゆれが靜つてから、家を見れば、家の中はごつたごた、あまりの恐ろしさに外へ出て見れば、大學はすでにもえてゐる。その内に又、がた／＼ゆれだした、その日から、あはれにも、お菓子もない水は出ない。米は玄米だけ、次の日からは、玄米を食べなければならない。米はざら／＼で、麥くさくて、とても食べられない。

何といふ、なさけない事であらう、おかずだつて梅干や、たくわんや、さつまいものにたの、それでも、いやだといつて食べなければ、おなかがすく、どうしてもたべなければならない。

焼けた人の事を思へば、そんなぜいたくはいへないと思ひなほして食べた。時々ばくだんの音が聞える。外を通る人は、皆しりをはしよつて、荷物をしよつてくたびれた足をひきずりながらすぎ行く。

ちよつと空を見れば空はまの様な雲がムク／＼してゐる。一面に赤いゐのぐをぬつた様で、血の様なお日様が出てゐる。

この様な恐しい日が三日も續いた。

そうしてついに大東京のほとんどは焼きはらはれて、多くの人は家も着物も、又親や兄弟もなくしたのであつた。野原になつた、大東京を元の様にするのは、私たちの力である。

だから私たちは、よく勉強して、りつぱな人になつて、一日も早く元の東京になる様に、つとめやうと私はかたく決心してゐる。

帝都復興

本郷區　眞砂尋常小學校
第四學年男　村田秀夫（十一才）

九月一日の恐ろしい魔の手の爲今迄にぎやかだつた此の東京は、家はつぶれ火に焼かれて見渡すかぎりの、焼野原となつた。そして殊に、本郷に避難者が多く來た、僕も其の一人である。僕は或る日曜日に、本所の焼跡へいつて見た。本所にはもう前と違つてずつと小さいバラックが立並んでゐて、人は忙しさうに自轉車で、荷物を運んでゐる。さうして電車も、方方に通じて、上野方面などは人や荷車で、身動きも出來

ない程大勢通つてゐる。さうして、どこも復興の氣分が、あらはれてゐた。僕が本郷にかへつて、電車通を歩いてゐると、どこかの子供が、「ひはてるるりのー」と元氣よく復興唱歌を歌つてゐた。

僕は此の歌を聞く度毎に、日增に盛んになつて行く、東京を思ひ出しては、早く元のやうな樂しい、都になるやうに、心のうちでいのつてゐる。

つまらない御年玉

本郷區　眞砂尋常小學校
第四學年女　天谷敏子（十二才）

學校から歸へるとげんくわんに見なれないくつがぬいであつたので、お母さんに、

「どなた」と、聞いた、お母さんは、

「お前の、大すきな方よ、あてゝごらん。」

「どなたでせうね、こうづのをぢさん。」

「いゝえ、」

「どなた、あゝ、わかつた、目黑のをぢさんでせう。」

「さうよ、よくあたつたね、」

「でもすきな方、と言へば、こうずのをぢさんか、目黑のをぢさんに、きまつてるですもの、」

「そうかそれでね、をぢさんがお前に御年玉を下さると言ふので、さつきから學校のひけるのをまつてゐらつしやつたのだよ、」「あらさう——を、どこにいらつしやるの」「ざしき」

ざしきには、おばあさんと、をぢさんと話をしていらつしやる。がらつ、とふすまを明けて、

「をぢさん、いらつしやい、」

「しばらく見ない内に、大變大きくなつたね、さう／＼敏ちやんに、いゝ御年玉がある」といひ乍ら、トランクの中から、大きな箱をとりだして、私に下さつた。何だらうと思つて、箱を明けようとすると、お母さんに、

「おれいは」と言はれて、赤い顏をしながら、

「有りがたうございます。」

「なーに、おれいはどうでもよいが、はいてごらん。」

箱のふたをとつて見ると、先にエナメルのついた、黑い半ぐつでした。
「あらいゝくつだわね」をぢさんのそばにゐた、妹がうらやましさうに、くつをいぢつてゐる。私のくつにしては少し小さくないかと思ひ乍ら、たびをぬいでくつをはこうとしたが、どうしても、かがとがはまらない。
「もつと足を入れなければはけないわ。」
むりに足を入れると、いたくて〳〵すぐくつをぬいでしまつた、これを見て居た、をぢさんは、
「なら富士ちやん、はいてごらん。」
妹は大よろこびで、たびをぬいで足を入れるとちやうどよい。
「富士ちやんには、おあつらいだわ、ずいぶん大きな足ね」妹は新しいくつをはいて家中をかけまわつてゐるので、
「まだあんたに、上げやしないわ、」
「ねえさんには、はけないくつなら、私にもらつてもいゝわよ。」
をぢさんは「それなら富士ちやんに、その靴をやつて、敏子ちやんには今度きた時もつと、大きいのをもつて來てあげるから、いいだらう」
「早くね、をぢさん、」
「あゝいゝよ、早くもつて來るから、今日はこれで、おいとましよう。」
「ぢやあ、さようなら、」
と立つた、妹は「さようなら」といつて玄關に走つて行つた、樣子がにくらしかつた。

燒跡見物

本郷區　千駄木尋常小學校　第四學年男　服部宣

私は此の前の日曜日に、お父さんと淺草に燒跡を見にいつた。
上野近くなると、あの大商店と言はれた松坂屋は、やけてしまつて、見るかげもないが、さすがは松坂屋です、ソノ跡にバラックが出來て大そうなにぎわいであつた。
それに引かへて、淺草近くなると、だん〳〵さびしくなつて來て、石ぐろうや、電車の燒けたのが、そこちにあつた。
とう〳〵淺草についた。だん〳〵中にはいつて行くと、仲店の燒けた跡に、テントが張つてあつて、その中で色々な品物を賣つてゐた。

くわん音樣を拜んで、池の方に行つた。池のぐるりを、見物すると、たくさんあつた、活動が一つのこらず、やけてしまつて、その跡が、れんぐわの山になつてゐた。池を見ると、八月の末まできれいにすんでゐた水が、どろ〳〵などろ水になつてゐて、こいや、ふなの死んだのが、かなしく見える。

花の都の公園も、お池の廻りの活動も、皆んな、灰になつちやつた、きれいなお池の水までも、今はどろ〳〵どろ水だ、なんとかなしい事でせう。

九月一日の大地震

本郷區　千駄木尋常小學校
第四學年女　小林咲子

お晝一寸前、ごう〳〵と音がして、づん〳〵と家にひびき、あつと思ふまもなく、ぐら〳〵と家が動き、かべはくづれる。窓ガラスがこはれる、かはらは落ちる、餘り恐ろしいので、外へも出られず、おぜんの下へもぐつて、ふるへてゐた。

其の中、お父さんが店からかけつけ、一同坂本公園にひなんした。公園まで行く途中、何げんも、つぶれた家の中で助けてくれ〳〵と、苦しさうな聲が聞える。

兵隊さんや、巡査さんや、又は、大勢の人人がかけて歩き、其の恐しさは何とも言ひ樣がなかつた。

其の中、火事だ〳〵だと、あちらこちらで其の聲がきこえる。どうなる事かとふるへてゐる中、公園にひなんしてゐる人人で、身動きも出來ない程になつた。

午後四時頃になつて、巡査さんが來て、こゝはもう危險だ、早く丸の内へ行けと、命令があつた。

公園を出て、丸の内へ行くと、ここにもひなんしてゐる人で、一ぱいだつた。私たちは芝地の上にうすべりを、ひいてゐた。

其の中火事は、ます〳〵盛んになる。

火はうずまきながらもえ上る。空は一面に眞赤になつた、

其の間に、づしんづしん音がする、地震は、何度もゆりかへしがあつた。

心配して居る内に、夜は明けた。

食るものはないし、お腹はすく、困つて居た。そこへ兵隊さんが、パンを下さつたので助かつた。

あの廣い所一ぱいの人の中を、聲をからして、親をたづねる悲しさうな子供の聲を聞くと、私もかなしくなつて思はず、涙が出た。
今でも一日の事を思ふと、ぞつとする。

哀れな老人

本郷區　元町尋常小學校
第四學年男　吉井正彦（十一才）

大震災を思ひだすと思はずぞつとする、今なほ頭に浮んで、可愛相なのは一人の老人である。
火事の眞最中、僕と弟が、原つぱに逃げてゐると、前に一人の老人が、僕位の子供を連れて、來たがいきなり
『あッ』と言つたかと思ふと、後へぱつたり倒れた、僕と弟は「ハッ」と驚いて後へさがつて老人を見た。老人は「ふう〳〵」と言つて手足をばた〳〵やつてゐた。そばにゐた人が之を見て、『大變だ』と皆の人を呼出した。一人の人は、はだしで、井戸で水を汲んで、手ぬぐひをしめして、頭へのせた、一人の人は手をもつてゐた、一人の人は「爺さん、暴れるとなほ惡くなるから、」と言つても、「ふう〳〵」いつて、暴れ續けるのである。
あゝ可愛想にと思つたが、仕方がない、僕は急いで、藤さんのお庭の方へ、お母さんを尋ねて、やつとの事で會つて、しつかりと、手を引いて戴いた、あの老人はどうなつたらう。

お節句

本郷區　元町尋常小學校
第四學年女　松岡榮子

もう直き、三月のお節句です。
私の家には四人の姉妹と去年の震災前に生れた、たつた一人の弟があります、ですから、三月のお節句には四人のお祝ひ、五月には、一人の初節句のお祝ひをします。
お節句がくるので、皆喜んでゐます、妹はこの間からもう、おひな樣を飾つてと言ひます。
私がまだ早いと言ふと、妹はすました顏で

「もう明日よ、」

と言ひますので、何時も笑つてしまふのです。

私の妹はまだ學齡前なのです、私達のおひな樣は、お人よしの浦島太郎や、きれいな小町姫や、その外澤山あります。

五月のお人形もあるのです。

楠木正行の櫻井驛の別れの場には、いつでも涙ぐみますが、そのお人形は三つの時、なくなつた兄さんのですから、毎年飾ります。

去年の九月あゝした大震火災の時、私の家は無事に助りましたので澤山のおひな樣も燒かずにすみました。おまけにお父さんが今年も、おひな樣を、買つてやるとおつしやいましたから、私共の御友達は益々にぎやかになるばかりです。

おひな樣と言ふと、去年の三月頃に、學藝會があつた時『おひな樣』と云ふ題で、童話劇をやりましたから、其の時の事を思ひだします。今年も去年の樣な、樂しい學藝會を、したいけれ共、去年の地震の爲になつかしい學校が燒けてしまつたから、多分出來ないでせう。早くお節句になればいゝと思つて居ます。

待ちどほしい妹の爲にも、私共のためにも。

九月一日（房州で）

下谷區　根岸尋常小學校
第四學年男　安本正二

九月一日には私は房州にゐた。あの日は、朝から棒の樣な雨がざあ〳〵降つてゐたが、十一時頃にやんで、晴天になつた。私達は、晝飯を食べてゐた時『ドーン』と音がしたかと思ふと、ぐら〳〵と、家が搖始めた、私ははだしで飛出した。かと、思ふと、家はつぶれてしまつた。地が波の樣に搖れてゐるので、歩くことは出來ない。赤ん坊の樣にみんなはつてやつとのことで竹藪の中に入つた。

皆は竹にしがみついてゐた。方々で泣さけぶ聲が聞える。又、つぶれた家の中に居る人達を助る爲に、大勢の人がさわいでゐる聲も聞える。その中に、宿の人がおへつついを出して來て、ごはんをたいて、にぎり飯を作つてくれた。さつそく食べ始めたが氣がせわ〳〵してゐるので、おいしくもなんともない。

近所の人達もにげて來る。その中に、つなみが來ると言ふうはさがたつたので、人々は大さわぎである。宿の人達は、海に行き舟を上の方に上げて來た。その中に、左の

方に火の手が上つた。私の家では、かり小屋を作つて其の中に恐しい、一夜を送つた。

東京市の復興と我等のかくご

下谷區　根岸尋常小學校
第四學年女　清水道子

九月一日の大震さいに、ひきつゞいての大火さいで、花の都とうたはれた、大東京もたちまちの中に火の海と化してしまひ、火のきえた時には、あはれにも、やけれんがや灰におほはれてをりました。

この大東京を元のやうに、いや今までよりも、りつぱに復興させるのには、まづ第一に我々が、お互にいつしやうけんめいに、べんきょうをし、父母のをしへに、したがひ、けんやくをし、愛國の心をふるひおこして、世のため人のために、つくさなければなりません。

一月十五日の地震

下谷區　忍岡尋常小學校
第四學年男　相賀保男（十一才）

ねえさんが僕を起した、目がさめてはつと思ふと、ぐらぐらとゆれてゐた。僕は、むちゆうで、外へとび出した。

「まあたすかつた」と思ふと体が寒くなつてきた。足の裏がつめたくなつてきた。女中が下駄を持つて、姉さんが着物を持つて來てくれた。其の中にふと空を見ると、一つの星がすうつと飛んで、ぱつときえた。僕はその時始めて流れ星と云ふものを見た。父は「若しこれよりも、大きな地震が始まつたら、お地藏樣の石垣を一間位はなれた所にゐろ、」と云ひましたから、僕は地震がはじまつたら、お父さんのおつしやつた、位の所にいかうと思つてゐました。幸にその後別に地震がなかつたので、僕はほつとしました。

一月十五日の余震

下谷區　忍岡尋常小學校
第四學年女　森美榮子

がた〳〵と地震の音に目がさめた。小さいと思つたら、だん〳〵大きくなつて、まくら元の柱がぎち〳〵と音をたててゆれるし、まどががたん〳〵ゆれるので、こはくてどうする事も出來ない。私は目をつぶり、ふとんをかぶつて、今か〳〵とやむのを待つてゐた。ゆれるさい中に、お姉さんが、「いやね、」とおつしやつたので、私はなぐさめる樣に「大丈夫々々々」と、くりかへして言つたが、心の中では心配だつた。どこかで火事だ〳〵と言ふ聲がきこえた。九月一日の樣に、大火事になるかと思ふとあの時の事が、あり〳〵と目に浮んで恐しくてならない。ねま着のまゝで起きて學校の、お道具をむ中で、かばんに入れた。そしておど〳〵しながら、手さぐりで、着物を着た。方々のかべが、おちてゐてたゝみは、ざら〳〵してきみが惡い。はしご段をころぶ樣にして下りて、はだしのまゝ外へ出た。前のつぶれた家の前へ行つたらもうお母さんも、近所の人も、皆ちやうちんやろうそくを持つて、地震の事を話しあつてゐる。

私は外へ出ても足がふるへて思ふ樣に歩るけない。角の電信柱の線から、時々火がパッ〳〵と出るので、角の家につくかと思つて心配だつた。段々明るくなつて學校に行く時間が來た。もう大丈夫だらうと思つて、家に入り、地しんで落ちた品物や、こはれた品物をかたづけた。九月一日の樣に、あんなにひどくなくつてよかつたと思ふ。

あゝ變つた東京

下谷區　練屏尋常小學校
第四學年男　中山　清（十二才）

去年の九月一日の、大震火災の爲、日本一の東京も、前のやうな美しい家はたいていやかれて、今は見る影もなく、あれはてゝしまつた。僕はこの間、友達と上野の山へ上つて方々を見下した。

バラックの家は、ならんで來たが、まだ所々に、燒土の高い山が見えた。僕はしばらくの間、みてゐる中、ふと心にうかんだ物があつた。

それは十二階の事であつた。この間まで美しく高くそびえてゐた、あの十二階が、今はその形さへ見えなくなつてしまつた。僕はあの十二階で、面白い芝居を見た事もあつた。

又八階まで上つて方々を、ながめた事もあつた。たくさんの屋根からぬけ出て、高くそびえてゐたのは、實に美しかつた。

あゝこの東京の有様は、どうしたのだらう。神様は、どうなされて下さるのかと、友達と話をしながら下りて來た。途中で上を見るとめずらしい事に、眞黑に燒けたと思つた木から芽が出始めてゐたので、うれしく思つた。その時方方に電燈が、ついたので、いそいで我家をさして歸つた。

しづかな夜

練屏尋常小學校　第四學年女　岡田定子（十二才）

私は今一人で勉强してゐます。あたりは、しんとしてなんの物音も聞えません。柱にかかつてゐる時計が、チン／＼／＼と、十時をうちました。となりの室からはかすかに、妹の寢いきがきこえます。

『あゝくたびれた』

と言ひながら窓を明けてお庭の方を見ると、月がさへてゐて、そこらがはつきりと見えます、そのまはりにはたくさんの星もまたゝいてゐます。私はふと、なくなつた、お母樣の事を思ひだしました。私たちをあんなにかはいがつて下さつたお母さんが、なぜおなくなりになつたでせう。あのやうに何やらさゝやき乍ら、私たちを見まもつていらつしやるお星樣の中におじい樣またお母樣もまじつていらつしやるのでせう。じつとお星樣を見つめてゐるとき向ふの方から、カチ／＼と火の番がまはつてきました。私ははつと氣がついてそこいらをかたづけ、妹のねてゐるお室へきました。妹はもうぐつすりねてゐます。私は寢床へはいりました。けれ共、なくなられたお母樣の事、おそをろしかつた地震の事、あとから／＼思ひだされてなか／＼ねむられません、時計見るともう、十一時です。ひやうし木の音も、いつか消えてしまひました。

不安の夜

下谷尋常小學校　第四學年男　桑原甲子雄（十二才）

『そら來た』と言ふ間もなく、ぐら／＼がた／＼と、屋根瓦や土藏の壁が、すさまじい音立てゝ落ちる。

皆の者は一時に寄集まる、高い塀が波の樣に動く、その恐ろしさは何ともいへない。地震が止むと同時に皆顏を見合せて『あゝこはかつた。』その内、四方八方に火事が起つた。日はだん／＼に暮れかゝる。人々は荷物をかつぎ出す。女子供は泣いて逃げる。

僕はそれを見て、これはどうなる事だらうと、思つて何ともいへぬ心持がした。まつたく夜になると、電氣は消えても火の光で、あたりは一面に明るい。その美しさと、恐しさに一時は何も忘れてゐた。

『それ逃げるのだ』と父に言はれて、人ごみの中を通つて、やうやく他にひなんしたが、その夜は人のさわぎと、又地震と、火が來はすまいかと、不安におそはれて、全くねられなかつた。

今でも夜になると、時々その日の事を思ひ出し、地震と火事の話で夜をふかす事がある。

震災後の東京

下谷區　下谷尋常小學校

第四學年女　大川トシ（十一才）

上野の山へ上つて見ると、見ゆる丈は燒原でありましたが、此の頃急に家が多く出來ました。大通りなどは、家が建續いてどこを見ても、あいてゐる所はありません。又道を往來する人の姿は、ずゐぶん質素になりました。家の建方を見ても少しのお金で美しく見えるやうに、人々は工夫してあります。そして一日も早く、復興させたいとつとめて居ります。

私たちも震災前より、むだなお金を使はないやうにして、學用品でも、おもちやでも、出來るだけ、節儉を守り、よく働いて一日も早くよい帝都をつくりたいと思ひます。

九月一日

下谷區　東盛尋常小學校

第四學年男　高島力（十二才）

九月一日の事であつた。僕は二かいでねころんで、本を讀んでゐた。すると、とつぜん、ぐら〳〵ゆれだした。『じしんだ。』と思つたが、いつもの樣な、小さいのだらうと思つてゐた。ところが、だん〳〵大きくなつて、今にも家はつぶれさうである。僕は驚いて、とびおきた。下へおりやうと思つたが、はしごが、たほれさうで、おりられない。僕はこはくて、ぶる〳〵ふるへながら神樣をいのつてゐた。その中に地震はやんだ。僕は『あゝよかつた。もうすこしゆれてゐれば、つぶされるのだつた。』と思つて、かけおりる樣に下へおりた。すると、又ゆれだした。今度はずゐぶん大きい。

となりの方でどうつと音がした。お父さんが『早く出ろ。』と言つたが、足がふら〳〵して出られない。お父さんは僕や妹をかゝへて外へ出してくれた、見ると道路は、砂煙で、もう〳〵としてゐて電車道にはたくさんの人が出てゐた。となりの家が、めちやくちやにつぶれてゐた。その中に方々に火事が出來た。その時僕はもう東京には、すまれないと思つた。それからすぐにぼくらはにげじたくにとりかゝつた。

なつかしい友から

下谷區　東盛尋常小學校　第四學年女　芳野邦子（十二才）

昨日學校から歸るとお母さんが『邦お前に小包が來てゐるよ。』とおつしやいました。私はさあ誰からだらうと思つて直に、『誰からですか。』と聞きますと、『まあその箱の上にあるから御らんよ。』との返答に、とんでいつて裏を見ると、一番仲のよかつた、あさ江さんからです。私はかばんもかけたまゝ開いて見ますと、中にはあさ江さんが、皆さんと一緒に、お寫眞やお手玉や、お菓子やおもちやがありました。あさ江さんとは隣合せで、いつも仲よく遊んでゐたのですが、大地震の際京都へいらつしやつたので、それからは一度もお目にかゝらなかつたのです。所へ今お寫眞が、とゞいたのですから、手に取つて、長い間じつと見ました。あさ江さんは、やはり昔のやうに、ぱつちりした、お目をはつてよくとれてゐます。お手玉はきれいなきれで上手につくつてあります。去年のひな祭には、あさ江さんと二人で、豆いりと、白酒の御馳走でおまゝ事をしましたが、今年はおひな樣もなく、あさ江さんも、いらつしやらないから一人でさびしい、お節句をむかへるのかと思ふと、ほんとうにさびしう御座います。晚には私はお禮の手紙を書いて出しました。

見舞の返事

下谷區　入谷尋常小學校　第四學年男　杉山強

御親切な御手紙を下さつて、まことにありがたうございます。僕等の學校はやけないで、無事に殘つて居ます。

震災前は何も知らないで、ぜいたくをしましたけれども、震災後はぜいたくをしないで、よく勉强して、この大日本帝國に忠義をつくさうと思ひました。僕等の組では家

が燒けた人も、燒けない人もあります。僕は家が燒けましたので、只今はバラックを建てゝ住んで居ります。皆さんによろしく、お體をお大切に、先は御禮まで。

九月一日の地震

下谷區　入谷尋常小學校　第四學年女　久我ひづ子

九月一日の朝、弟と私は學校へ行つて、式が終つて歸つて來ると、すぐに三味線のおけいこに行つた。待つてゐるお友だちと、あそんでゐると、なんだかなまあたゝかい風が、さつと一時に吹いて來た。その風が吹き終らない内に急に、『がた〳〵みしり〳〵』とゆれだしたのが、あの大地しんであつた。私はもう、おそろしくて、おそろしくて、たまらないので、お師匠さんのそばへ皆一所に寄り集つた。お師匠さんは、一生けんめいに、おねんぶつをとなへてゐた。私も口の中で、自分にも何やらわからない事を口走つた。其の内に又もや、『がた〳〵みしり〳〵』とゆれたので、私は恐しくて〳〵、もうこの世の終りかと思つた。それはさうと、早く家の者がむかへに來れば、よいのにと思つてゐる所へ、お父さんが、まつさほな顏をして、むかへに來た。私はお父さんに連れられて、電車道へ出た、出ると、ともに又ゆれかへしが來た。私はもう氣がわさ〳〵して來て、電車道へすわつてゐたが、すぐに止んだ、急いで家へかへつた。

そしてすぐに家のそばの銀行の庭へ出た。それからも、餘震が幾度かあつた。其の中に一ぺんに三方が火事になつた。見てゐる内に三方の火事が四方八方の火事になつた。私はお父さんや皆家中の人に別れて、弟と二人で店の者につれられて舟ににげて、川岸に居ると、四方八方が火になつたので、もうこゝには居られないと言ふので、芝浦方面へにげた、もう晝からお父さんやお母さんに別れたきりなので、悲しくて〳〵たまらなくなつて、弟と二人で泣いてしまつた。店の者が「大丈夫だ〳〵」と言つて、なぐさめてくれても、どうしても泣き止まらなくて、二日中弟と二人で泣いてゐた。其のあくる日の三日に、店の者がお父さんやお母さんをさがしに行つて、歸りには皆と一所に歸つて來たので、私はうれしくて〳〵たまらなかつた。弟を見ると弟もうれしさうに笑顏をしてゐた。お父さんやお母さんのお話をきくと、大變おそろしい目に會つたと言ふ事であつた。それから間もなく、麻布の親類へ、御やつかいになる事になつたのである。

二つのおべんとう

下谷區　西町尋常小學校
第四學年男　赤坂清綱（十二才）

だん〳〵火がつよくなつたので、お母さんと一しよに荷物を持つて行く事にした。僕はまだ、おひるをたべなかつたので、おなかがすいて〳〵しまひには歩けなくなつた。ちやうど其の時親類の叔母さんに出あつた。叔母さんは、ふろしきの中から、二つのおべんとうを出して、お母さんにくださつた。叔母さんは「家は大丈夫だから、すぐゆくやうに」とおつしやつて、そのまゝ、私たちの荷物を出しに行かれました。お母さんと二人は山の手の方へ行く電車がそこに止つてゐたので、その中でおべんとうをたべた。そのおべんとうは、本當に命のおべんとうであつた。そのおべんとうの、おいしさは、何とも云へなかつた。そのおべんとうをたべてから、人込の中を、叔母さんの家にいそいだ、だん〳〵夕方になつたのでこまつたがやつと、叔母さんの家に着いた。

今まで東京はどうなるだらう、僕たちはどうなるだらうと、生きた心もなかつたが、叔母さんの家に來たら、ほつと安心した。その夜は、くたびれたので、すつかり眠つてしまつた。

九月一日の震火災

下谷區　西町尋常小學校
第四學年女　宮下トシ（十一才）

九月一日の眞晝頃私の家では、お父さんとお母さんと妹と私と四人で、ごはんをいただいてゐました。ところが急にぐら〳〵と地震がゆれだしました。私はほら地震だといつて、まつさほの顔をしてそばのお寺の前へ、立つてゐました。

その中に又ぐら〳〵にゆれました、私はあまりこはいので、こわい〳〵といつてかけ廻りました。そばの箱屋さんが、しんせつに、たくさん箱を出して、さあおかけなさいと云つて下さいました。お母さんたちとこしをかけてゐましたら、そのうちのおばさんが、おむすびをこしらへて、さあおあがりなさいと云つて下さいました。けれど、私は何だか、こわいばかりでふるへてちつともたべられませんでした。私たちがそこのお寺の前で、こしをかけてゐたら、私たちの前に荷物をしよつたり、車につんだり

した、人たちが通つてゐました。火事がはじまつてから、だん〳〵火が近くなつて來ました。その時よその人が、すぐそこの、とういつかくといふ大きな建物のうしろに、火が來ましたといつたので、ばんの十二時ごろに、にげました。

にげる時あんまり人や車で、通れないので、車の下や、人の間をくぐつてゆきました。その時は、きのみきのまゝで、にげました。私のうちの、お父さんは足がわるいのでたいさう、なんぎをいたしました。

私たちは上野へはにげませんで、すぐほんごうの方へ向つてにげて行ました。途中でおなかがすいたので、すこしばかりもつて來たお菓子をたべて、がまんをしました。

私は、こんなこはい事にあつたのは、生れて始めてです。

大震災火災

下谷區　御徒町尋常小學校　第四學年男　野口廸男（十二才）

嗚呼大正十二年九月一日、此の日は我等にとつては、永久に忘れがたい日である。此の日は朝より、何となくむし暑く、小雨さへも、ぱら〳〵と降つてゐた。時は正に十一時五十八分、忽ち起る大震動、ごたん〳〵がら〳〵と、瓦はおちる、ガラスはこわれる。

めり〳〵と家のつぶれる音、さながら地獄の如くである。やがて地震も靜まつたので我等はほつと安心したのも、束の間、市内八十八ヶ所より出火して、あれよ〳〵と言ふ間に火は四方八方へ廣がつた。泣き叫ぶ子供の聲、逃げまどう市民の叫び、皆生きた心地はない。實に市中は火の海となつてしまつた。かくて二日二晩市内の三分の二を焼きつくし、十萬の人命をうばつて、三日明がたやうやくちん火した、明れば三日四方をながむれば、さしも花の都と言はれた、東京も、あわれ焼野原となつてゐた。所々に大きな建物がさびしく、殘がいを殘してゐた。我等は之を只ぼうぜんとながむる外はなかつた。兩國橋を越へれば、向ふは被服廠である。あの大きな、廣場は死人を以て埋められてゐたと言ふ。あゝ何と言ふ、悲慘な事であらう。市民は協力一致して、復興に努めてゐる。子供ながらもやはり我等も市民の一人である。今後益々勉强して家の爲國の爲につくしませう。

焼跡

下谷區

人々の情

下谷區　御徒町尋常小學校
第四學年男　内藤　清

僕が上野の山から、我が家の燒跡に行つて見ようと思つて、てく〳〵御徒町の電話局の所まで、來ました、すると、まだあちこちに、火が見えて、雨の中に吹いて來る煙の風に、いきがつまる樣でした。だん〳〵歩いて來て、我家の方に來て見れば、今迄長く住んでゐた、我家がどこにあるかわかりませんでした。近所の人にきいて、よう〳〵家のあつた所がわかりました。

あたりを見れば、そこら一面、燒け瓦や燒けトタンが散つてゐて家は影も形もなく何だか心細くなりました。今迄知つてゐた近所の人が、あゝと云つたまま、ぽろ〳〵と涙を流しました。

下谷區　御徒町尋常小學校
第四學年男　高木定丸

日本未曾有の大震災言ひ知れぬ慘狀、人々の苦しみは、なんと例へ樣がありません

でしたが、これが各地方に傳はると、各地方からはきそつて、米類食料品等を近い所は、自動車、馬車、荷車、遠い所は軍艦、汽船にまんさいして人々を助けやうと、東京へ運ばれて來ました。それを役員の手から、私たちへ配給してくれます、こうゆう親切な人々のおかげで、私たちは、大へん助りました。又外國からは毛布、材木、食料品等を、どん〳〵寄贈してくれたり、病院を立たりして、食物のない者や、病氣で苦しんで居る人々を助けていたゞいた事は何とも言へない、有難い事でありまして、私たちはアメリカから送られたと云ふ、天幕の中で幾日か勉强する事も出來ましたので、ほんとうに有りがたい人等だと思ひます。恐れ多くも天皇陛下、皇族樣方からは、人民の事を御心配になつて、御金や衣類等を御下賜下された事は、深く有難く忘れる事の出來ない事であります。震災にあつた者は、陛下の有難い御心を忘れずにはやく立派な大日本帝國の首府にきづきあげて、天皇陛下の御恩にむくひ、外國の人々や地方の人々に、御恩返しをする樣にしなければなりません。

のり賣り子供

下谷區　御徒町尋常小學校

第四學年女　伊藤良子（十二才）

九月一日、それはほんとにおそろしく、悲しい日でした。それでもうれしい事に、家内中皆無事でした。焼け出されてから、一時板橋へひなんしました。何ともいへぬ、つまらない日を、毎日〳〵送つてゐました。或る日のこと、「今日は〳〵」と言ふ子供の聲がするので私は、「どなた」といつて、障子をあけますと、丁度私位ひの男の子が、「のり買つてくれない」と言ふので私は「母さんのりいらない」と言ふと母さんは「見せて下さい」と言ひました。すると、その男の子は、やつて來てのりを見せました。「をばさんの家も焼けたの、をばさんの家、死んだ人がゐないでせう」と言ふので、母さんは「え〻、あなたの家は」と聞きました。すると其の子は、こらえきれない樣な顏つきで、「僕の家では父さんと兄さんが、荷物をとりに行つてごふく橋の所で死んでしまつたの」と言つて、だまづてしまひました。其の時私は、あゝかはいさうに、こんな小さな時から、お父さんに別れるなんてと思ひましたが、なほ後からこんな遠い所まで、賣りに來るのだ、あれもお母さんたちの爲に、はたらくのだなあと、かんしんしました。

其の男の子は、「をばさん又買つてねー、おねがい」と言つて出ていつてしまひました。

そして、それからとなりへ〳〵一軒々々、「のりはいりませんか」と言つて行きましたがどうきいても、かはいさうでした。そして、しまひには、其の聲も遠くの原にきえてしまひました。

大震災の思ひ出

下谷區　谷中尋常小學校　第四學年男　松原秀輔（十一才）

ごうーと云ふ異樣な、ひゞきが起つたかと思ふと、急に家がぐら〳〵つと、うごき出し、

「今にやむか、今にやむか、」

と思つてゐる内に

「ガラ〳〵〳〵〳〵カチヤ〳〵〳〵〳〵、」

と物の落ちる激しい音、

「どうしようか、」

「つぶれはしまいか、」

と、震るへてゐる間に、さしもの强震もやんだ。

「あゝよかつた、」と思ひながら立ち上ると、

「こんな大きな地震があつた時は、餘震がくるよ。」

と母がおつしやつたので、もとの所へしやがむが早いか、又大波の樣にゆれだした。もうこわくて家の中へはおちついてをられない、母と一所に表へ飛び出した。表には人々が皆あわてゝ飛び出してゐた。

どの家も瓦は落ち、かべはこわれ、或は、倒れかゝり、中には瓦が、すつかりふるい落された家など、物すごい有樣に變つてゐた。「秀ちやん天王寺の墓地へにげませう、」と寫眞屋の、おぢさんがおつしやつたので、四五人で、まさ屋の横を通つて、延命院の前へ出た。お寺の中には、ござをしいて人々がもう一ぱい座つてゐた。

天王寺より、この所の方がよからうと、持つて來たござを敷き、其の人々の中に加つた寫眞やのおばさんが、

「おちやわんもみなかけちやつた、」と持つて來られたおはちから、御はんをついで出されたので、皆よろこんでいたゞいた。其の時はもう寺の中は僕等が來たときよりも、ずつと多く人がは入つてゐた。空は火とにゆうどう雲の樣なもので、一ぱいになり、太陽はいやに赤く照つて、ドーン〳〵と云ふ爆發の音と、地をふるはせる餘震はたえなかつた。

道には荷車を引いたり、荷物をかついだ男や、女が、大波の樣におしよせて動いてゐた。

母が、「お父さんは少し、けがをして來たから、ゆわえてくるから、まつておいで、けれど心配しなくともよいよ。」

とおつしやつて、人ごみの中を、おし分けて、家にかへられたので、父のけがはどんなだらうかと、僕は其の間、心配でおちついてはゐられなかつた。やがて父も足に白い布をまいて、母と一所にかへつて來られたので、やつと安心した。

夕方になつても、前の家の中學へあがつてゐる、建ちやんは、まだかへつて來ない、おぢさんは杖をついて、迎ひに出て行かれた。

あたりはもうまつくらになつた。そして火ははつきり見えはじめた。けれ共道のこんざつはだん〳〵ひどくなるばかりだつた。火は次の日ももえてゐた。そして少しも衰へなかつた。夜になつて遂に上野の常盤花だんに火がついた。もうこゝにゐては、危いと云ふので、父と母と三人で、天王寺の墓地へ、父と母は夜具を、僕はおいはひに

學校の道具を背負つて逃げる事になつた。父と僕はたびはだし、母はぞうり、父は一番大きな、荷物をせおひながら、一番先にたつて、

『何何さん』『何何さん』と名を呼びあふ聲のたえず聞える中を、人ごみを分けて、どん〳〵行かれる。僕は母の後に見失はない樣について行つた。

墓地の中は、もう木と木の間へかやをつゝたり、ちやうちんをさげたりして、人で一ぱいだつた、父は其の中を、ずん〳〵おくの方へ行かれた。そして倒れた石塔の側に立ちとまつて、「さあこゝへおけ、」と言ひながら、やみの中に、荷物を置かれるのが、かすかに見えた。母がその上に、僕が一ばん上につみ上げた。

ほつと息をついて、しばらくは、墓石に腰かけながら、いつになつたら、この火事が終るだらうと見てゐると、眞赤な空を火の粉がものすごく、飛んで行く。何といふおそろしい夜だらう。又餘震はちよい〳〵地をゆすつたり、墓石をふるわしたりする。一時頃であつたらふ。

火が大分消えたので、あたりは一そうくらくなつた。

「もう大丈夫だ、かへらふ。」

と父がおつしやつたので、再荷物を背負つて家へかへつた。

今思ひ出しても、恐ろしい、天王寺のまつくらな墓地で、ブル〳〵震へる、石塔に腰かけて、眞赤に燒けた空をながめてゐた。

九月二日の夜を、

僕等の今後建てなほす、大日本の帝都東京は、あのやうな、おそろしい火にならない丈夫なものに作り上げねばならない。

地震の二字

下谷區　谷中尋常小學校
第四學年女　櫻井實智子（十二才）

あゝおそろしかつた、去年の大地震。

がた〳〵と家がゆれだしたので、おどろいて立ち上ると、地震はます〳〵ひどくなつて來て、どうする事も出來なかつた。外に出て見ると方々の人たちが、わい〳〵と大さわぎをやつてゐた。其の內にあちらでも、こちらでも、家がつぶれたといつて居た。

それからみんなで、大いてふの下に逃げこんだ。

その内にまもなく夜となつた。
空は方々の火事で眞赤になり。火の粉がとんで來てその時のおそろしかつたことは何ともいひ樣がなかつた。私たちは三日のじゆくをした、子供や親をさがす人々が聲をからして、呼び歩いてゐるのを聞くと、ほんたうに、きのどくでならなかつた。
遠くの方では、ばくはつの音が物すごく聞えて、其おそろしかつた、こと……
かうしてりつぱな東京が、まるで野原となつてしまつたのだ。
家は幸ひに燒けなかつたけれ共、いつになつても此の事は忘られない。
それからと云ふもの、私は「地震」といふ字を見てさへも、おそろしい氣がする。

上野のバラック

下谷區　金曾木尋常小學校　第四學年男　吉井　一

九月一日後の東京は、東を見ても、西を見ても、皆バラックになつてしまつた。
道の兩がはには、まだ所々に燒けた、とたんや、かはらが、たくさんある。昨日僕は上野の公園に行つたら、たくさんバラックがたつてゐる。公園の木と木の間には、つなをはつて赤んぼのをしめや、着物でまくのやうです。上野のバラックはづいぶん、ひどい、といふことです。雨がふればもる、雪がふればとけてもる。
さうして夜は、ずい分寒いさうです。上野の山から見わたすと、見わたすかぎりバラックのとたんで、まるで畫間は海のやうにぴかぴかひかつてゐます。
大工さんが、方々でいそがしさうに、家を立てゝゐます。

九月一日

下谷區　金曾木尋常小學校　第四學年女　三島アサヨ

九月一日おひるごはんをたべてすこしやすんでゐると、『ごーつ』とものすごい音がしたかと思ふと『ぐらぐら』大地がゆれだした。大いそぎで、おかあさんとにはへ飛び下りると、地震はますます大きくなり、つかまつてゐる所がないので、やつでの木の上に、私たちはころんでしまつた。第一震がおはると、第二、第三といふ風に、地震は大きくなつた。お父さんはいつものもの、お父さんで、すこしも外へ出ない。私たちが、お父さん早くお出なさいよ』といつたが、お父さんはまどの手すりにつかまつた

まゝ『いまにやむ、いまにやむ』とおつしやつたまゝ、すこしも出ない。けれども、うらの四軒屋が『どつ』とすさまじいひびきと共に、くづれたので、それにおどろいて出て來た。

おとなりから『あぶないから、早くいらつしやい』とおつしやるので、おとなりの庭へいつた。けれども地震は、頻々として人々は生きた心地はなかつた。

その中、三の輪からもえだした火は、どん〳〵ひろがつて、もうしたくをしなければならなくなつた。そこでお父さんたちは、うちへいつて、にもつをとりまとめにかゝつた。おとなりの庭には私一人、こはくて思はず『おゝこはい』といつたら、お父さんが、しんげんぶくろと、こうりをしよつて、『さあおいで』とおつしやつたのでついていつた。

そして學校へ來たが、學校には死人が四人もよこたはつてゐた。その中に地震はどんどんくる。お父さんのお話によると『活動寫眞の所までもえて來たが、お寺でくひとめた。とおつしやつたので、まず〳〵よかつたと思つた。

なぜつて、うちには大切なお人形や、おひな樣やその外いろ〳〵の、ものがあるから……。

死んでも此の子さへ助かれば

下谷區　黑門尋常小學校
第四學年男　中村太郎一

下でお茶わんの音が、がちや〳〵、聞えだした。

一せつな『ごーつ』といふ物凄い音がしたと、思ふと忽ち何ともなかつた、僕の家がまるで、うづにまかれた樣にゆれだした。

僕はあまりの恐ろしさに、大きな聲で、「お母さん、こわいよう、」と半分は泣聲で呼んだ。するとその恐ろしい中に、

『太郎ちやん起きちや、いけないよ、あぶないから』

といふお母さんの聲がした。間もなく地震はやんでお父さんもお母さんも上つてゐらつしやつた。僕はひやあせでびつしよりになつて、ぶる〳〵ふるへてゐた。お母さんが、

『あゝ、ほんとうに、こはかつた』

と話してゐる中に、又ぐら〳〵とゆれだした。お母さんは、

『私が死んでも、此子さへ助かれば』

といひ乍ら自分の體で、僕をかばつて下さつた。其の時お隣りの藏が、どどつと、すごい音を立てて落ちて來た。

僕は餘り、おそろしいので死んだ樣に、ぐたりとなつてしまつた。

やうやく、地震が靜まつたので、僕はお母さんに、おぶさつて、地下線の原つぱへ逃げたが、それもほんの、つかの間で、おそろしい火におひまはされ、方々でおそろしいめにあつた。

今では上野の、バラックに住むやうになつた。

僕が目をつむつて、考へるとあの時の、

『私が死んでも、この子さへ助かれば』

といはれた、あの言葉を思ひだすと、僕は、

『お母さん、あの時は、ほんとうに有りがたうございました』

と心の中でつぶやきます。

今はごぶ掃除

下谷區　黑門尋常小學校
第四學年女　石川千惠

『ぐら〳〵つ』

ゆれたかと思ふと、つゞいて藏の石は、どか〳〵落ちる、硝子は、がら〳〵こはれる

ほとんど生きた心地はありませんでした。

その中にこんどは火事、私は早く學校の道具を、出さうと思つて、二階に行かうとすると、『又ぐら〳〵つ』ときます。しようがないから、衣桁にかかつてゐる、銘仙と袴とを、ふろしきにつつんでしよつておりました。すると、お父さんが、

『早く椽の下におはいり』

とおつしやつたから、妹と弟をつれて、えんの下にはいつて、小さくなつて、ふるへてゐました。

しばらくして、お父さんが、

『上野へ逃げた方が、よからう』

とおつやいますから、お母さんを、たよりにして、上野の山へ逃げました。

此處へ來て見ると、人と荷物で一ぱいで、身動きも出來ません。

空を見れば一面の煙で、下を見ればまるで火の海です。そのうちに、上野があぶないといふので、今度は日暮里に逃げました。ついてまもなく、今度は〇〇人が、ピストルを持つて、はいつて來るといふのです。

私も其の時は、死ぬかくごで居りました。

今は家もやけてしまつて、石藏のこはれたのを、少し直して、それをすまひとして暮して居ります。

お母さんは、毎日一生けんめいに藏の石をかたづけたり、どぶ掃除をしたり、まるで土方の樣な事をしてゐらつしやいます。

燒けない前はこんな、どぶ掃除なんかしなかつたのに、震災の爲こんな事をするのかと思ふと涙が出ます。今考へると、あんな緣の下の中で、小さくなつて居ないで、たくさん荷物を出せばよかつたと、時々家中揃つて其の話が出ます。

九月一日の地震

下谷區　山伏町尋常小學校
第四學年男　大谷　巖（十二才）

學期始めの式がすんで、家で勉强をしてゐた時であつた。急に地震が來た、あつと言つて立上り、柱につかまつてゐると、段々大きくゆれてまるで、乘物に乘つて坂を下る時の樣に恐しかつた。

僕はあの時、にげやう〳〵と思つても心が、まるでかけ出した時の樣に、どき〳〵して何とも言ひやうがなかつた。少しゆれが靜まつたから、すぐ外へ出樣とすると、又ゆれて來て、ちつとも走ることが出來なかつた。僕は思はず、外へ飛下り、急いで前田樣の原へかけにげた。そこには後から後から、方々の人たちが荷物を持つて、走つて來た。その中に又小さなのが幾回かゆれて來た、僕は其のたびに、びくつとして、一足も先へ出ることが出來なかつた。

そうかうしてゐる中に、夕方近くなると、淺草の方の火事が近づいて來たので、これは大へんと思つて、めんじやうと、學校の道具を持つて、鶯谷のかいだん下へひなんした。恐ろしい夜はすつかり明けたので、學校はと聞いた。昨夜の中に落ちたと、お父さんに申された。僕は何より殘念だと思つた。

大地震大火事の思ひ出

下谷區　山伏町尋常小學校

第四學年女　矢澤シゲ（十二才）

あゝあの恐ろしい九月一日の大地震、悲しい事には大地震の後は燒野原となりました。地震の時、私は學校から歸つて、すぐに御飯を食べやうとして、御膳へ向ひましたら、ぐら〳〵〳〵と大きな地震になりました。その時私は思はず『地震だ』と叫びました。

近所の人々は皆外へ飛び出しました。私はどうする事も出來なくなつて、箸を持つたまゝ、すくんでしまひました。

お母さんは、弟をだいて外へ出てしまつて。私一人殘されました。御膳の上の御茶わんがおぢつたり、佛樣が落ちたり、時計が落ちたり、障子や、からかみが、はづれたり、壁がばら〳〵おつこつたりしました。一時地震がやんだので、外へ飛びだすと同時に人々が『火事だ／／』と言ひました。空を見上ると黑い煙が、四方から上つてゐました。お父さんはゐらつしやらないし、どうしたらよいかと思ひました。そのうちに、お母さんが『地震がこはいから前田樣のところへ行きませう』と言つて、近所の人と一しよに行きました。かれこれ三時になる頃、お父さんが眞青の顏をして飛んでゐらつしやいました。お父さんは大きな聲を出して『こんな所にゐたら燒死んでしまふぞ』とおつしやいました。

私達は急いで家へ歸つて、二階へ上つて見ましたら、四方八方煙が上つてゐました。それから荷物を、かんり局の前の廣場へ運んでゐると、もう煙がこちらの方へ向つて來ました。その時は夜の八時頃でした。それから上野の山へ上つて、兩大師樣の所のおにはへ來て、お父さんがへいを破つて入りました。其時はお母さんも、お父さんも顏が眞黑でした。私とお母さんは、おしりをはしよつて手拭をかぶつてゐました。兩大師樣の中へ入りましたが、なんにも食べなかつたので、おなかがすいてしまひました。食物はないし水もないし、困つてしまひました。その時よその人が、びんに水を入れてきましたから、その人に水のある所を聞いて、水をお母さんが持つて來ました。其の水は博物館の池の水ださうです。其の水を家中で一升も飲んでしまひました。それからお寺へ行つて玄米のおむすびをもらつて、食べてゐましたら、門の外で〇〇人だ／／と、わい〳〵言つて居りました。二日の夜に、火がどんどんこちらの方へ向つて來ました。私達はお墓の所へねてゐましたが、一時はにげ仕度にかゝりました。夜が明けると空が少し曇つてゐました。そのうちにお母さんが、御飯をたいて下さい

ました。その御飯は白米です。兄さんが、ばけつに入れて持つて來たのです。雨が降つて來ましたから、本堂の中へ入りました。中は、ずいぶんこんざつしてゐます。それから五六日たつうちにだんだんと、地震の大きいのがなくなりますし、〇〇人も靜かになりましたから、家中初、皆の人がほつと息をつきまして、やう〳〵御飯もお茶わんで食べられるやうになりました。それから私も、兄さんも、上野の臨時學校にかようやうになりました。こんな恐ろしい事は二度とないと思ひます。今考へるとあの時の事が、まるで夢のやうに思はれます。

おついたちの大地震

下谷區　竹町尋常小學校　第四學年男　赤岩良一

きふに家がうごきだしたので、僕はおどろいて外へとび出ました。外へ出てみるとかわらはおち、ガラスはこはれ、かべはおち、町ぢゆうがおそろしい音をたてて、ふるへてをりました。道のまん中に大せいの人が、みんなとび出してをりました。中には、はだかでゐる人もあります。僕ははだしでとび出してゐました。

そのうちに「火事だ、」とみんなが、よけいにさわぎだしました。僕はどうなる事かと泣きたくなりました。その中に、お父さんは、小さい妹をおぶつて、「さあ學校へにげよう、」とおつしやいました、僕はお母さんの手をしつかりとにぎつて、お父さんの後について、學校の方へはしりだしました。

地震の時

下谷區　竹町尋常小學校　第四學年女　館野キヨ（十一才）

どんよりと、にごつたやうな空の中から、赤黒い太陽が時々おどかす樣に顔を見せる。灰色の綿のやうな雲が、のそり〳〵と、私の方によつてくる。私はその雲を、おに雲の樣に思つておそれた。美代ちやんは、其の雲を見てないちやつた。今では、こわいと思ふと、その事がはつきりとうつる。

大震火災

下谷區　臺東尋常小學校
第四學年男　日詰一雄（十二才）

ぢしんだぢしん　大地震
きのみきのまゝ　にげだした
夜は野原に　夜をあかす
あくれば二日　つむじかぜ
なにもかにもと　まきあげる
家は丸やけ　かへられず
げん米たべて　小屋つくる
しばらくすぎて　學校へ
くれば校舍も　丸焼けで
ただうれしいは　先生の
お話きいて　元氣づく
あすより日々の　べんきやうは
むしろをしいて　のでんにて
めぐみの本や　えんぴつで
ならひし事を　忘るまい

大地震にあつて

下谷區　臺東尋常小學校
第四學年女　新榮靜（十二才）

夢かと思ふほどおそろしい、大震大火災の時には、もうにげる事ばかり考へている内に火は、四方八方からもえてゐるのでした。私の家から、二三間となりは、もうぼう〳〵ともえ上つてゐました。今この家がやけたら、どこへにげるのだらうと、考へました。私は心細くなりました。日はくれ、私の家も焼いてしまひました。いよ〳〵ゆり直しがやつてきました。もうその時にはねんぶつを、となえるばかりでした。そうすると、そばの人が手の骨を折つたと云ふので、よく見て見ますと、となりの伯父さんでしたので、お父様や、お母様が、かいほうをしてあげました。しかし火があぶ

ないので、下根岸の、矢澤さんのおやしきに、ひなんしました。
水もなくなり、食物もなくなつてしまひました。其の時丁度お兄様が、おべんとうのこつたのをもつてきて、下さいました。それを口に入れようとしましたが、自分も食べたければ、人もなほたべたいのだらうと思つて、お母さまや、姉さまにあげますと、お母さまや姉さまは涙を流してあがりました。

私のバラック

下谷區　龍泉尋尋小學校　第四學年男　加山清一郎

九月一日の大地震に、僕の家はすぐつぶれて、其上吉原方面と、三河島方面から來た、おそろしい火で一たまりもたく、燒けてしまつた。

僕は先生と一つしよに、上野の山にひなんした。十日頃に、僕の家は燒あとに小さなバラックをたてた。着物も、ふとんも、だいどころの道具も、皆燒けてしまつて不自由で不自由でしかたがない。勉强するにも机はなし本箱はなし其上家はせまくて、ねる所もごはんを食べる所もひとつである、さうして私のバラックは朝になると、とたん屋根から霜どけが、どこへでもおちてくるし、風がふいたり、雨がふつたりすると、おそろしい音がして、こわくて、こわくてたまらない。早く早くもとの樣な家に、はいりたいと思つてゐる。

大震災の思出

下谷區　龍泉尋常小學校　第四學年女　伊藤ワカ

あの一日です、學校であそんでをりますと、お友だちが、『今日はなんだかむしあついわね』と言ひました。私は學校から歸つて階下で遊んでゐると、向ふからドーと、いふ間もなく、ぐら〳〵がら〳〵つと、ゆれ出しました。お母さんもお父さんも、みんな『地震だ』といつたが早いか、ごうつと家がつぶれました。

お母さんと私とは、はりの下になつてしまひました、間もなく、出してもらつて外へ出ると、どうでせう、火はもう、私の家のそば。私はその時はむが夢中です、お父さんの手にしつかりしがみつきながら、芝崎町の日輪寺といふお寺へにげました。金龍學校がやけた時、火の粉が飛んできてどうにもしやうがございません。私は又お父さ

んと上野へにげました。あくる朝、線ろへつかまつて、お母さんのことを心配してゐますと、小さなふろしき包をしよつた、お母さんが見えました。あゝ、一日あはなかつた。お母さんです。私は『お母さん』と思はず、大聲で叫びました。すると向ふで「たつまきだつ」それといふ人の聲、私はもう何をしていゝのか、さつぱりわかりません、そのうち聲も、やみましたので、やつと安心して、「あゝおそろしかつた」と思ひました。あの時のことを思ふと、今でも、からだがふるへるやうです。

情をうけて

下谷區　大正尋常小學校
第四學年男　阿部正男

震災火災の後は、もうどうしてくらして行かれるかと思つた。ところが思ひの外町會からは米、みそ、などをいただいた。其時には、この米や、みそなどは、どこから來る物だか、さつぱりわからなかつた。そのうちに學校も始まつた。ぼくは思はず『ああうれしい』とさけんだ。これもどこのだれがテントなどを送つて下さつたのだかと、ぼくは毎日内で考へてゐた。きつと、ぼくのあたまが、ばかになつてゐるだらうと思つたこともあつた。それから學校へ來た。すると思つたとほり先生が『これは亞米利加から送つて下さつた物です』とおつしやつた。其後大阪からは机や、かばんなどを送つて下さつた。又方々の地方からは、御本や慰問袋など、なさけのこもつた品々をいただいた。其の時ぼくは『あゝありがたい』となみだをこぼした。方々のおくりものです。何一つ買はずとも、不自由なく勉強が出來る、なんと言ふありがたいことでせう。お父さんも、お母さんも、すまない〳〵と言つてゐらつしやる。これから一しようけんめいに勉強して、種々の物を送つて下さつた人々に『ぼくがほんとに、こまつた時に、皆樣のお情をうけて、かうして、勉強したのです。』とおれいを、しなければならないと思つた。『人からうけた、おんはきつとかへさなければならない。』と言ふことを先生が、おつしやつた。ぼくも一しようけんめいに勉強して、きつと恩をかへさなければならない。

恐ろしかつた九月一日

大正尋常小學校
第四學年女　山本光子

私は學校から歸つて、お友だちと遊んで居りますと、きうに地がゆれ初めましたので内の中へ飛びこみますと、やがてがら〳〵と屋根のかはらが、落て來ました　おかあさんも姉さんも、一つの柱につかまつて居り、私もその所へつかまつて居りました。やがて、おちついたので、裏へ出ましたが、おかあさんは店が大事ですから、私たちとべつ〳〵に居りましたから、私の心配はたとへやうもありませんでした。十二階から火事がでたと、もうして居りますが、みるみる内に、火の手は上りだん〳〵と家のそばに近くなつてまゐりました。それから、おかあさん一人で、荷物のよういを初めましたが、何分にも女ですから、思ふやうに出來ません、お兄さんは地震の時に、おつこちられましたが、べつだんけがもないので、すぐおたなにかへりました。その後おいでになつた時には、もう皆さんが、立ちのいたあとでした。お姉さんが、すこしづゝ荷物を上野まではこびました。私たちはまだ、晝はんをいたゞいて居りませんでしたが、おなかはすきませんでした。おかあさんと、姉さんと私の三人は、その日上野で、をそろしい一やを明かしました。

お晝のごちそう

下谷區　萬年尋常小學校
第四學年男　上島義男（十二才）

私たちの身體が強くなるやうに、學校で御ちそうを食べさせてくれます。お晝はばんの時も、御飯の時もあります。ばんの時は牛乳やしちうをいただき、御飯の時は色々うまいおかずをいただきます。食べる日には、又あのあたゝかい御飯をいただくのだと思ふと、うれしくてたまりません。御飯はあつたかいし、おかづはさつま汁で、肉や、おいもや、にんじんや、だいこんなどたくさん、はいつてゐるから、おいしうございます。學校で、ごちそうをいたゞくので、大だすかりだ、有りがたい〳〵といつて喜んでゐます。

私の家

下谷區　萬年尋常小學校
第四學年女　田口ヒデ（十二才）

私の家は山伏學校の近所で、バラック建てのせまい家で、屋根も、まわりも皆ブリキです、たゝみもしやうじもありません。夜は寒い風が、ピユウ〳〵とふき、朝は霜

がとけて、ねて居る顏やふとんの上に、ぽたり〳〵たれるからこまります。家主が本けんちくに建てるさうですが、それも今年建てるのではありません。來年か、さらい年建てるのださうです。おとうさんがバラックは、さむいから建てなほしたいといつて、居りますが、それもいつだか、わかりません。

九月一日

淺草區　待乳山尋常小學校
第四學年男　岡田幸保

思ひ出してもぞつとするほど、おそろしい九月一日のことである。僕は食卓に向つて、はしをとらうとすると、たちまちやなりがして大地震がおこつた。僕は思はず

『地震だ』

と叫んだ。見る〳〵うちに家はつぶれ、のきはかたむき、昨日にかはるありさまとなつた。

『外へ出ろ、早く〳〵』

と父が叫んだ。皆んな外へ出て、つぶれた家の屋根に上つて、あたりを見まはした。すると誰か大きな聲で、

『火事だ〳〵』

と叫んでゐる者がある、僕は驚いて、

『えつ火事だ、どこに』

と言ひながら、なをよく見まはすと、なるほど火は盛にもえてゐた。一方、二方、三方からもえて來る。煙は天をこがすやうに、えん〳〵ともえてゐる。

父の叫はつゞいておこつた。

『おまへたちは、先へにげろ、あぶないから早く〳〵』

と父が言つて、つぶれかかつた家の中へ、荷物を出しにとびこんで行つた。僕は母や姉や弟と、一しよに吉野橋の橋ぎわまで、にげのびて、そこで父や、兄を待つことにした。五分、十分いくら待つてもこなかつた。しばらくして向ふの方から、重さうなつづらをかついで兄が來た。

『お父さんは、一しよに來たんじやないの』

『ああそこまで、一しよに來たんだけれど、この人だからわかれちやつたんだ、それより早くにげよう』

と言つて歩き出した。僕は人なみをわけながらやつと、上野の山へひなんした。その夜はそこで一夜を明かすことになつた。

あくる日の夕方父は死んだものと思つてゐると、近所の人の知らせで、やつと父に會つた。僕はほんとうにうれしかつた。

『お父さん』

と言つて、互にかなしい中にも、手を取り合つて、心から祝し合つて喜んだ。

恐ろしかつた九月一日

淺草區　待乳山尋常小學校
第四學年男　岡田四郎

思出しても震え上るほど恐ろしい、あの九月一日。

僕が御飯を食べようとすると、地鳴がして『がた〳〵』つと家がゆれ出した。

僕は御飯をふり捨てて『地震だ』つと叫けんで家の中をうろうろしてゐた。お父さんが『皆んな外へ出ろ』と言つたから、家中の者は外へ出た。見れば前の家はつぶれてゐた。早くも、その家の屋根に乘り上つた誰かが『火事だぞ』と言つた。僕は驚ろいて『なに火事なの』と言つて四方を見廻はすと、なるほど火事で、火は晝間の空を黑くこがしてゐる。お父さんは又『お前たちは早く先へ逃げろ』と叫んだ。僕等は、『お父さん先へ逃げてはだめです、お父さんと一しよに行かないと、まよいごになるから』と言ふと、お父さんは『いやお前たちは、あぶないから早く逃げろ、お父さんは後から行くから』と言つた。僕たちは『それでは行きますよ』と言つて、電車通りへと出た。吉野町の所へ來ると誰かが『吉野橋が落ちた』と言つた。さあ僕は驚いた。お母さんが『とにかく行つて見やう』と言ふので行つて見ると、落ちもくづれもしないでゐたから吉野橋を渡つて、淺草公園を通つて、上野の山へと着ゐた。晚になると一そう空は眞赤になつた。上野の山で一晚泊つたが寢ることも、休むこともできなかつた。

朝、顏を洗ほうとしても洗へず、腹はへるし、からだはだるいし、ずゐぶん苦しかつた。とう〳〵十二時頃になつた。あたりの人は、むすびを食べてゐた、親切なおばさんが僕にむすびをくれた。

僕は喜こんで食べた。その味は非常にうまかつた。

今でもその親切な、おばさんとむすびの味は忘れられない。

復興

淺草區　淺草尋常小學校
第四學年男　辻　嘉壽夫

さしも立派な大都會であつた東京市も、大正十二年九月一日の大震災の爲めに、わづか一日二日の内に、見る影もない、昔の武藏野ヶ原となつた。僕が十五日もたつて、燒野原へ來た時は、學校もなく、商店もなく、これより先はどうなる事かと思つたがさすが大都會である。どし〳〵家も立ち、學校も立ち、活動、芝居等の小屋も立ち、わづか百日もたたぬ内に、前と變らない、却つて今日ではにぎやかな位だ。此の分で三年、五年とたち、市區改正もすみ、本建築もすんだなら、それこそ前よりも、もつともつと立派な、世界一の大都會となる事だと思ふ。

僕も帝都復興と共に、大いに勉强して世界一の大都會にはぢぬ少年になる考へだ。

私のゐなかに置いてある人形

淺草區　淺草尋常小學校
第四學年女　磯貝すゞ

私は九月のぢしんには、つゝみを一つ持つて、上野へ逃げますと、後からをぢさんが、私の色々な物を持つて來て下さいました。その中には、私がいつもかはいがつてゐました一つのお人形がありましたので、大そううれしうございました。三日目に其のお人形を入れた、つゝみを持つて、ゐなかへ行きますと、ゐなかのおばあさんは私達が無事でしたから、大そうよろこびました。それから二ヶ月も、おばあさんの家でおせわになつてゐる中、かはいゝお人形を出して遊ぶのが、何より私のたのしみでした。やがて十一月になりますと、私の家が出來ましたから、私はお人形を持つて、お母さんと歸らうとしますと、おばあさんが、お店もいそがはしいから、てつだはなくてはいけないから、お人形を持つて行つてもだめですから、置いておいでなさいといひましたから、かはいゝ顏をながめながら、別れを、をしみつゝ、おばあさんにわたしました。それから皆さんにお別れして、東京へ歸つて來まして、毎日學校へ通つてゐますが、今でも時々、このお人形のことを思ひ出しますと、いつもさびしいやうな氣がしてなりません。いつになつたら、お人形は私の手へ歸ることでせう。

雪の朝

淺草區　精華尋常小學校
第四學年男　柴崎俊夫

朝起きて見ると、たいさう寒かつた。戸を明けて見ると、屋根の上にも、木の上にも眞白で、まぶしい程です。向ふの方の燒けこげた木にも、美しい花が咲いて居る樣です。半分たふれかゝつた、教會のれんぐわべいや、燒とたんの上にも、塵箱の上にも、やはらかい綿をしいた樣です。それで東京の町々が、まるで生れかへつた樣です。これからはいつでも、此の銀世界になつてゐるといゝと思ひました。地震前よりも、たしかにきれいです。私等のバラックが本建築になつた時も、こんなに美しくあればよいと思ひます。地面には、やはらかなわたを引いた樣です。犬は樂しさうに雪の中をじやれまはつてゐます。所々に足だの足跡や、くつの足跡等が、きれいに列をならべて、遠くへきえて居る。

ほんたうに、雪のけしきは美しい、私は大すきです。雪をかいたり雪なげをしたり雪つりをしたりして遊びました。學校へ行くと、廣い庭一面におさとうをちらした樣

です。

天幕の上にまで雪はのつてゐます。

なんと美しい朝なんでせう。

地震の時

淺草區　精華尋常小學校
第四學年女　森たゞ子

八月三十一日鎌倉から歸つて來たばかりであつた。そうして近所の、お友達に貝をあげたりして、其の日は一日樂しく遊んだ、一日朝起きて、御赤飯を食べて、學校へ行つたが式だけあげて歸つて來て、着物をきかへ、勉强部屋へかけて來た。其日に限つて御飯が早かつたので、お父さんが、今日はばかに早くて鎌倉式だねといひをはらぬうちに、地なりがして、驚いて居ると、段々大きくなつて、お勝手のたなに、のつてゐた、お鍋が落ちてきた。するとお庭の方の石どうらうが、づどんとたふれて、金魚ばちをかいた。表の方を見ると前の、五色揚屋の家の油が火の中に落ちたので、もえあがつたが、すぐけした、二かい目の地震が止むと、家を出た、そして荷車を使は

うとすると、澤山あつた車が、一臺しかないので、車につめるだけ積んで行く所をきめて上野の池のはたへ行つた。そうしてお米が少しあつたので、女中が御飯をたいてくれたので、それをおにぎりにして食べた。そして隣の人々に分けてやつた。そのうちに暗くなつたので、仕方なくこうもりを屋根にして、一夜をあかしたが、まはりが一面の火が池にうつつて、こわくてこわくて、ねむられなかつた。

豆

ま　き
淺草區　柳北尋常小學校
第四學年男　牛込鎭二

今日は朝から、豆まきの事を考へてゐて、夜になるのが、まちどうしかつた。いよ〳〵日がくれて、節分の夜となつた。すると、おとなりでしきりに『鬼はア外福はア內』と大聲にどなつてゐるのが聞えて來る。僕は思はず、おどり上つた。そして家の中へ飛びこんでいきなり『おつかさん！豆は？』といふと『豆は今いつてゐるんですよ』といはれたので、しばらくまつてゐた。お勝手の方から豆いりの、こうばしいにほひがする。近所では、あちらでもこちらでも、『鬼はア外福はア內』の聲がするので氣が氣でなかつた。やう〳〵豆はいれた。僕はさつそく桝をかゝへて、第一番に神だなの所へ來た。そして出來るだけの大聲でせい一つぱい『鬼はア外福はア內』とどなりながらながら豆をにくい鬼にぶつつけてやつた。お店へも、おざしきへもまき終つてから僕は赤んぼうのやうにはい、皆ちらばつてゐる豆を拾つては食べた。その中に一つぶもなくなつたので、こんどは桝をかゝへて食べはじめたら、いつの間にか五十三も食べてしまつた。するとおぢいさんが笑ひながら『何だお前は十二になつたんぢやない？十二の者は十二だけ食べればいゝんだよ、それに五十三も食べたら、お前は五十三になつたんだね？』と言はれたので、皆んなからも笑はれてしまつた。

もう豆まきの聲も聞えなくなつた。神だなの、うすぐらい所に、大きなふくろを、かついだ、大こくさまがにこ〳〵笑つていらつしやるさうだ。

今夜は、さぞかし鬼のやつめ、こまつてゐるだらう。

おてゝいつぱい　豆もつて
『おにはア外』　『福はア內』
あとは　にこにこ
福ばかり。

夜道のかへりがけに

淺草區　柳北尋常小學校
第四學年女　小林善子

母『君子さんずい分寒いわね、思はずおそくなりました。サア急ぎませう』
君『ハイ、みんなお家が小さくなつて、一そう寒いやうですね。』
母『さうね、もうせんは夜でも晝のやうに明るかつたが、此頃は少しおそくなるとどこをどう歩いてゐるのかわかりませんね。ほんとうに夜道は、さびしくなりましたのね。』
君『エヽ、去年の夏お母様とゐなかへ行つて、夜歩いたことが思ひ出されますわ。』
母『エヽ、さう〳〵花の都と方々から、見物人が見えました。大にぎあいの東京も、かわりましたね。』
君『お母様、今頃はあらつぽい、しるしばんてんきた人が、たくさんゐますね。』
母『それは方々の家を作るのに、いそがしいからでせう。』
君『おやヽ、何か話する聲がするわ。』
十二階『高いたて物といつたら、私が一番よ、』
市内のお屋根を目下に見てたが、
地震にまけてこのとほり
今はどこかに取りかたされて
じまんしたのもゆめのうち。』
母『あゝもう美倉橋にきました。』
君『ねえお母さん、この土は一体どうしたのでせう。まるで高い山が出來ましたね。』
母『それは方々の燒けあとから運んで來たのですよ。』
君『ほんとうに「ちりもつもれば山となる」といふ事は此の事ですね。』
母『ええよく知つて居りますわね。』
君『こゝは衛生試驗所ですね。』
母『このたて物はよくのこりました。』
試驗所『あゝあぶなかつた、助かつた。』
けむりや火の子がとんできて、
私のお顔にぶつかつた、

けれども私はれんがの体、
けむりや火の子にまけはせぬ。』

母『このへんは、もう大ていバラックが立ちましたね。』

君『お母さんこのごろは學校へ行く時見ると、方々から大工の音がとん〳〵ときこえます。』

母『そりや、やつぱり東京です。東京の人はこん度こそはと、一生けんめいに力をつくして元の東京にしやうとしてゐるのです。けれども三年や、五年で、なか〳〵元の樣にはなりません。あなた方が早く大きくなつて、もつと立ぱな東京にしなくてはなりません。』

君『ハイ、それは學校でも、先生によくをそはつて居ります。そしてあの地震の時にうけた外國の御おんは、きつとかへさなければなりませんね。』

母『さうです。大そうよいお考へです。まあもう家です。早く行つてお休み致しませう。』

春が來る

淺草區　育英尋常小學校　第四學年男　本田大二

庭の梅がそろ〳〵咲き初める時節となつたが、全部灰になつた東京市内には、木々の青々した、若葉さへちよつと見ることができない。しかし新しい都には、新しい春が日に〳〵近づいて來る。

のどかな日本晴の朝早くから、鶏の歌につれて、あちらこちらと、かけまはつたり日曜毎につみ草に出かけたりする、たのしさを思ふと、うれしくて、心がおどりたつ程である。

今年はどこの櫻が、一番よく咲くであらう。毎年美しい花を見せ、ゆかしいにほひをかゞせてくれた、僕の八重櫻もかげさへも、見せなくなつてしまつた。

すみれたんぽぽ
れんげ草
さびしくなつた
この庭に
なんの花でもかまはない

ただ一りんでも
さいとくれ
あゝたのしい春よ、ゆかいな春よ、
一日も早く冬の神とかはつて、僕等をまもつてくれ

人の情

淺草區　育英尋常小學校
第四學年女　鈴木靜子

九月一日の大地震で、上野の山へ避難した時は、もう食べ物がない。どこへ買ひに行つても、どうしてもない。そこへ日暮里の、武山さんの家から、たきだしをして下さつた。その時の心持は何ともいひ樣がなかつた。私たちの、そばには、お母さんらしい婦人と、八ツ位の女の子と、まだ生れたての赤ん坊と三人で、泣いて居た。

わけを尋ねると、お父さんの行方がわからないといつた。私はかはいさうになつたから、お母樣に話して、すこし食べ物をわけて上げた。親子は泣いて喜んだ。その後もあの親子の事を、度々思ひ出して、どうなつたかと思つてゐた。その後巢がもにゐる時であつた。その親子からお禮狀がきて、お父さんが無事で歸つた事がわかつた。私はあの子供が、どんなにうれしかつたらうと思つて私まで涙が出た。

るすゐ

淺草區　富士尋常小學校
第四學年男　小川好一（十二才）

『火に氣をつけておくれよ』とよく〳〵言つた母の言葉が聞えるやうだ。『火はきへてゐるかな』と不安の心で火鉢を見た。火の氣はなかつた。それでも、鐵瓶の水をかけた。しゆうつと白い煙が上つた。

もう大丈夫だなと、僕はほつといきをついた。ふうとつめたい風が吹いて來た。讀んで居た本の頁が、ひら〳〵とまつた。

がた〳〵とねずみの音がした。何だかさびしい。あゝこんな時に、早く父が歸つて來ればよいなあ。庭の方でこここと、にはとりがさわぐ。線香の細い煙が二本、行方もないやうにもえて居た。